

古典期アテナイにおける学問伝統の諸展開

和泉 ちえ

前 5 世紀後半アテナイは「全ギリシアの知恵の殿堂」(Plato, *Prot.* 337d) として地中海世界に君臨するが、その学問伝統の根は、アテナイ固有の大地に由来するとは言い難い。当時アテナイは、エーゲ海東西の新旧文化圏の諸力学を反映する巨大な渦動の中心地として機能しており、そこに吸い寄せられた知的諸成果は、そのほとんどが外来種であった。本稿は、エーゲ海東岸の古来の文化的芳香を身に纏うソクラテスの知的遍歴を再考しつつ、また生粋のアテナイ貴族プラトンが試みた西方新勢力との文化折衝の顛末に目を向けながら、マケドニア由来のバルバロイ的世界観を背負う非アテナイ人アリストテレスによる学問系譜論に内在するイデオロギー的諸問題を論じ、古典期アテナイにおける学問伝統の諸断面を、新たな角度から炙り出したいと思う。

I. 「第二の航海」を巡る断章¹

1. 序

前 5 世紀アテナイにおいて一つの学問領域として萌芽したフィロソフィアの臍の緒が、イオニアをはじめとする当時の東方先進文化圏の土壌に豊かに蓄積された自然探求の系譜に確かに連結するという見取り図は、古代の諸証言が活写するソクラテスの知的遍歴あるいはペリパトス学派によるギリシア哲学史をあらためて想起するまでもなく²、古来より 21 世紀初頭の今日に至るまで、哲学に関与する無数の学徒の共通認識として機能する。しかしフィロソフィアは、自然探求という母体の中から、祝福された赤子として生まれ出たとは言い難い。例えばプラトンが描くソクラテスの知的遍歴によれば³、豊饒なる母体（自然探求）に対して胎児（フィロソフィア）は深い絶望感を抱いており⁴、その前途を待ち受けるのは表層的に幸福な恵まれた日々ではなく、むしろ躓き多き茨の道行きであった⁵。こ

¹ 本章は『思索』第 45 号 21-37 頁に掲載された拙論（和泉 2013）に基づく。

² しかしアリストテレス『形而上学』A 巻が提示するペリパトス学派編纂のギリシア哲学史の見取り図には、マケドニアによる文化政策を反映する意図的偏向が付随すると筆者は考える。この問題に関しては、和泉（2010）：95-120 参照。

³ Plato, *Phaed.* 96a5ff.

⁴ Plato, *Phaed.* 96c3-6, 98b7-8, 99d4 etc.

⁵ Plato, *Phaed.* 99c5ff.

の状況を端的に物語るためにソクラテスは、「第二の航海 (*deuteros plous*)」という文言を使用する⁶。古注によれば、この語句は「順風が途絶えた際に、櫂で船を漕ぐ航海」を意味し⁷、自然探求という母体の庇護を離れたフィロソフィアの航路は、自然が与える風の恵みによって導かれるのではなく、フィロソフィア自身の内発的推進力によってのみ拓かれるのであった。

本稿は古代の諸証言を手繰り寄せながら、自然探求からフィロソフィアが誕生する素過程を個別的に再考すると共に、この両者の関係の行方を射程に入れた「第二の航海」を巡る断章を綴りたいと思う。

2. ソクラテスと自然探求

史的ソクラテスが実際どの程度自然探求に従事したのか否か、両者の緊密さの度合いについて明瞭な証拠を直接的に提供しうる古代の証言は、残念ながら存在しない。しかしソクラテスに対する不敬罪告訴事由の一つに「天空および地下世界に関する探求」という項目が登場する事態は過小評価されるべきではなく⁸、またアリストファネス『雲』に登場する天文・幾何学に没頭するソクラテスの天翔ける姿や⁹、あるいはプラトン『パイドン』が披瀝する「自然探求に熱中する若き日のソクラテス」の知的遍歴¹⁰、さらに加えて、プラトン諸対話篇に登場する「ソクラテスの歌舞仲間」¹¹を構成するメンバーの学問的関心事項が、当時の花形分野を専有する弁論術的学知に向けられることはなく、むしろ大多数の人々の憐憫と嘲笑を誘発する表層的に無益な天文・幾何学に集中すること等々¹²、上記列挙したこれらの痕跡は全て相俟って、自然探求とソクラテスの密接な関係を示唆すると推測される。またクセノフォンが、ソクラテスに対する告訴状を念頭に朴訥に展開する「ソクラテスは万有の性質についても他の多くの人々のようにこれを論議することを欲せず、学者たちが扱う宇宙の性質を問うたり、個々の天界現象を支配する必然を尋ねたりすることなく、かえってこうした問題を詮索する人間の言語同断を指摘した」¹³という弁明路線の背後にも、逆説的にはあるが、自然探求に寄せるソクラテスの好奇心の在処が揺曳するといえよう。ソクラテスは元来、フィロソフォス（哲学者）ではなく、自然探求に従事する一学徒であった。

⁶ Plato, *Phaed.* 99d1.

⁷ Eust. in *Od.* 1453. 20.

⁸ Plato, *Apol.* 18d7-8, 19b5, 23d5-6. ソクラテスに対する不敬罪告訴理由に登場する「天空および地下世界に探求」を巡る問題については、和泉 (2006) : 1-17 参照.

⁹ Aristoph, *Nub.* 188-234. アリストファネスと天文・幾何学の関連に関しては、和泉 (2009a) 参照.

¹⁰ Plato, *Phaed.* 96a5ff.

¹¹ 例えば Plato, *Theaet.* 173b3.

¹² Plato, *Theaet.* 173d-176a. etc.

¹³ Xen. *Mem.* 1. 1. 11-12.

では一体何故にソクラテスは自然探求と決別し、「第二の航海」に乗り出したのか。既に論じ尽くされているとも思われるこの問題を、本章において敢えて提起することには躊躇を覚えるが、ソクラテスの転回点に関与した諸要因について、あらためて目を向けることも徒勞ではあるまい。自然探求に対するソクラテスの批判を可能にした背景は一体何であったのか、そしてまた「第二の航海」それ自体を可能にした方法論をソクラテスが如何に習得したのか。

『パイドン』に描かれるソクラテスの知的遍歴を表層的に辿る限り、自然探求が提示する「原因」の存在論的身分について彼は疑義を呈していた。即ちソクラテスは、空気やアイテールや水、あるいは骨や腱等々の物質的存在を「原因」に据えることによって成立する学知のあり方に、極めて懐疑的であったのである¹⁴。しかし質料因の探求は、元来イオニア的ヒストリエの正統的方法論を踏襲するものであり、その枠組みを遵守する限り、むしろソクラテスの批判こそ的外れであるとも解釈される。再び問う、自然探求に対するソクラテスの批判を可能にした背景は一体何であったのか、と。

この問題は様々な角度から検討可能だが、本章では特に、文化史的観点から考察を加えたいと思う。ギリシア世界とイオニア以東の文化圏の関係を巡る近年の文献学的諸成果によれば¹⁵、古代の東方先進文化圏の神話伝承において、地水火風などの質料的存在は単なる無機的物質ではなく、宇宙万有を構成する「神々」として広く認知されていたという¹⁶。この状況を念頭に置くならば、東方先進文化圏の影響を濃厚に反映するイオニア的自然探求は、「万物の原因」として君臨する「神々」、即ち「空気やアイテールや水」に関する学知を提供すると解釈される。それゆえ「空気やアイテールや水」を「的外れな原因」として拒絶するソクラテスの反応は¹⁷、東方先進文化圏が育んだ古来の異民族的学問伝統に対して、知的新興勢力として台頭しつつあった前5世紀アテナイの知識人が本性的に抱く、一種の違和感を反映するとも推察される。ソクラテスにとって「空気やアイテールや水」は神々ではなく、可視的・可触的・可滅的な、欺き多き物体的存在にしかすぎなかった¹⁸。

上記見取り図に立脚するならば、ソクラテスの「第二の航海」は単なる比喩的表現の域に留まるものではなく、エーゲ海の東西に対峙する二つの文化的勢力地図を念頭に置いた「イオニアからの船出」を含意するといえよう。それゆえ必然的にその航路は、西方世界イタリア方面を目指していた。「第二の航海」に関してソクラテスが強調する並々ならぬ苦難は、東方先進文化圏から豊かに吹き寄せる順風を、敢えて遮断した状況に起因すると思われる。

このような無謀な挑戦を敢行したソクラテスの知的開拓精神もさることながら、「第二

¹⁴ Plato, *Phaed.* 96b3-8, 98c1-2.

¹⁵ West (1997).

¹⁶ 特にヘシオドス『神統記』が描出する「神々の系譜」としての宇宙創生論に投影された東方文化圏の影響に関しては、West (1997) : 276-305. Plato, *Craty.* 408d-e も参照のこと。

¹⁷ Plato, *Phaed.* 98c2.

¹⁸ Plato, *Phaed.* 78d-79a. etc.

の航海」を実質的に可能にした操舵術とは一体何であったのか、そしてソクラテスは、その技術を如何に習得したのか。以下、その手掛かりを辿りたいと思う。

ソクラテスによれば、「第二の航海」を可能にした技法は、当時新しい学問方法論として確立されつつあった「ヒュポテシス（基礎定立）」に基づく論証法であった¹⁹。この探求法の成立および普及に際しては、エレア学派が深く関与する。例えばゼノンは「ヒュポテシス」に基づく論証方法に関する一種の教本を著し、その書物を携えて師パルメニデスと共に前 5 世紀中葉アテナイに赴き、待ち受ける一群の学徒を前に朗読伝授したという。その次第はプラトン『パルメニデス』が克明に描写するところであり²⁰、年若きソクラテスもまた、ゼノンが紹介する新しい探求法に大いに興味を示す熱心な聴衆の一人であった²¹。前 5 世紀中葉アテナイの知識人の中には、東方文化圏の古来の学問伝統に対して距離を置く一方、西方イタリア方面からもたらされる新しい学問方法論を積極的に受容するという知的潮流が存在したと思われる。「ヒュポテシス」に基づく論証法は、パルメニデスによってフィロソフィアのための予備訓練として位置付けられ²²、この学問構造は明らかに、古来のイオニア的自然探求とは一線を画す斬新さを備えるといえよう。ソクラテスが敢行する「第二の航海」の推進力は、西方世界の新しい学問方法論によって供給される。アポダイクシスとディアレクティケーの技法を駆使しながら、ソクラテスは「第二の航海」の行く手を阻む難所を、次々と切り抜けていく²³。その活躍はプラトン諸対話篇の随所から、今も尚、鮮明に浮かび上がる。

しかし皮肉なことに、ソクラテスの知的遍歴の終幕において、彼自身が「魅惑の歌」として物語る天上および地下世界を含む全世界の可視的構造に関するミュートスは、既に別れを告げたはずのイオニア的自然探求の伝統を反映する諸言説によって、華やかに彩られていた²⁴。この結末は何を意味するのか。ミュートスの提示は、一般通念に訴える説得力の補強という目的ゆえの弁論術的常套手段として理解されるが²⁵、毒杯を仰ぐ直前にソクラテスが胸に描いた世界像の内実が、再び東方文化圏の学問伝統に吸収されるという事態は、ある意味において象徴的に、ソクラテス的フィロソフィアの限界を示唆すると思われる。イオニア的自然探求の圏外への脱出を試みたソクラテスは、西方世界から流入する新しい探求法を駆使しながら「第二の航海」を継続したが、実はその到達地点は、アテナイのトポスを越えることはなかったといえよう。ソクラテスは、求め続けたフィロソフィアの形を完成させることなく、不敬罪裁判で宣告された死刑判決を受け入れ、イオニア的世

¹⁹ Plato, *Phaed.* 100a3-7, 100b1-102a1.

²⁰ Plato, *Parm.* 127a-d.

²¹ Plato, *Parm.* 127c2-5.

²² Plato, *Parm.* 135c5-d6.

²³ 議論進行を「航海」に喩える箇所として、例えば Plato, *Parm.* 137a, *Prot.* 338a, *Rep.* 453d 等々。

²⁴ Plato, *Phaed.* 110b3-114d8.

²⁵ Isocrates, *Ad Nic.* 48.

界像を反映する「魅惑の歌」を唱えながら²⁶、ハデスへと下ったのである²⁷。

3. プラトンの知的遍歴

さてここで、プラトンの知的遍歴について目を転ずることにしよう。彼の遍歴もまた、西方世界を目指す「船出」と共に始まった。その具体的内実を提供する原典資料は、周知の如くプラトン『第七書簡』である。現存する13通のプラトン『書簡集』に関する文献学的真偽問題を巡って、現在も尚、断続的に諸家の間で議論が交わされているが²⁸、古代世界における書簡文学の大半が偽作であるという古典文献学的知見に基づくならば²⁹、そしてまたヘレニズム期に大量に作成されたピュタゴラス学派偽文書の成立経緯と伝搬過程を考慮するならば³⁰、プラトンとピュタゴラス学派の関係について現実味溢れる諸証言を提供するプラトン『書簡集』は、その文体および語彙に関する統計学的分析結果と共に³¹、偽作の刻印を押されて然るべきと判断される。

しかし偽作の刻印は、必ずしも当該文書の内容それ自体が全て虚構であることを意味するものではない。即ち、たとえプラトン『書簡集』が偽書であるとしても、そこに描出される光景が、どの程度史実として承認されるか否かについては、哲学・歴史・文学の垣根に拘泥しない西洋古典文献学的見地から、緻密かつ総合的に再検討されなければならない。しかし新約学の状況とは異なり、プラトン偽書『書簡集』の史実性を巡る議論を展開するために必要な、文献学的一次資料は極めて乏しい。従って、プラトンを巡る古代の様々な諸証言の背景および意図を一つ一つ洗い出しながら、プラトン偽書『書簡集』の各々に込められた作者の意図を抽出する作業が何よりも要求される。

プラトン偽書『第七書簡』に関する近年の研究成果によれば、当該書簡は、プラトン晩年にアカデメイア内部に流布した「ピュタゴラス学派の哲学体系をプラトンが剽窃した」という風評を、払拭する目的で執筆された可能性が高いという³²。この視点を考慮しつつ、プラトンの航海の動機について、あらためて検討してみよう。彼は一体何故に、アテネを出航しイタリアとシケリアに赴いたのか。

ギリシア哲学史概説書等に散見される「プラトンはピュタゴラス学派と親交を持つために、彼らの活動拠点であるイタリア・シケリアに赴き、その思想体系を学んでアテナイに戻り、数学研究を重視するアカデメイアを設立した」という見取り図は³³、その関連史料として『第七書簡』に言及する傾向にあるが、しかし実際、当該書簡は、このような筋書

²⁶ Plato, *Phaed.* 114d6-7.

²⁷ Plato, *Phaed.* 113d1-114c9, *Apol.* 40c5-41c7.

²⁸ 近年の研究としては、G. Lloyd (1990): 159-174, Gulley (1972) 103-144.

²⁹ Rosenmeyer (2001).

³⁰ Thesleff (1961), (1972): 57-102.

³¹ Thesleff (1961):77-96, Michaelson and Morton (1972) 89-102.

³² G. Lloyd (1990): 168-170.

³³ 例えば Field (1930): 223ff.

きの論拠を提供する文書ではない。アカデメイア設立とプラトンのシケリア訪問およびピュタゴラス学派との親交を関連付ける傾向は、ピュタゴラス学派の功績を折りに触れては強調するキケロ流の³⁴、イタリア半島学問伝統プロパガンダの影響を多分に反映すると推測され³⁵、ディオゲネス・ラエルティオスの諸証言もまた³⁶、その延長上にあるといえよう。『第七書簡』は、アテナイを出航したプラトンの航路が、何故にイタリアとシケリアを指さなければならなかったのか、その動機について直接的には何も語らない。この沈黙ゆえに、キケロ流の憶測的解釈が、まことしやかに流布し定着するに至ったと推察される。

『第七書簡』が描く三度に渡るプラトンのシケリア訪問に関して、第二および第三回目の渡航理由が明瞭に詳述される状況は、初回の渡航に関する動機の所在の曖昧さとの比較において、むしろ貴重な手掛かりを与えらると思われる。即ち、プラトンの第二・第三回目のシケリア訪問が、同志ディオオン（そして第三渡航の場合には、さらに加えてディオニュシオス二世とアルキュタス一派）による「要請」を受け³⁷、半ば不本意ながら強行せざるを得なかったのに対して、初回渡航に関しては、何らかの「要請」が介在したことを示唆する記述は皆無なのである。この事態は間接的に、プラトンの第一シケリア旅行の動機が、「要請」や「招待」によるものではなく、自らの意志に由来することを示唆するといえよう。その意図の具体的内実について、『第七書簡』は明示することはない。しかし初回シケリア訪問に至るまでの、ソクラテス刑死以降の10年間の長きに渡り、何故にプラトンが公的政治活動に関心を寄せながらも具体的行動を何一つ起こすことはなく³⁸、ただひたすら「国政に携わる者たちを観察」し続けなければならなかったのか³⁹、その状況を彼に余儀なくさせた要因を『第七書簡』から抽出することによって、シケリア初回渡航の動機を付度することが可能になるとと思われる。その手掛かりとして本稿は、『第七書簡』の以下の一節に着目する。

味方になってくれる者や信頼できる同志を持たないでは、実際行動はできないと思われる。そのような同志が現に存在していることを見つけることは、当時わが国の政治がもはや父の世代の習慣の下では営まれなくなっていたので、容易ではなかったし、また別に新しく同志を作ることも、容易ではなかった。(Plato, *Epistle* VII. 325d1-5)

上記引用箇所から伺えるように、シケリア渡航に至るまでの、長きに渡る潜伏期間をプラトンに余儀なくさせた要因は、「信頼できる同志」の欠如であった。それゆえ、プラトンが自らの意志において初めて企てた実践的行動、即ちアテナイからシケリアへの出航の、その具体的な目的には、このような「同志」の絆への希求が付随したと推察される。

³⁴ Cic, *Tus.* 1.39 etc.

³⁵ Izumi (2000) : 3.

³⁶ D. L. 3.6.

³⁷ Plato, *Epistle* VII, 328a-c, 338b-339e.

³⁸ Plato, *Epistle* VII, 324cff.

³⁹ Plato, *Epistle* VII, 325c.

『第七書簡』によれば、同志関係には二種類あるという。即ちその一つは「世間にありふれた、一般的な友人関係」⁴⁰あるいは「馴れ合い的な友情」であり⁴¹、他方、新たに提唱された「同志の絆」は「フィロソフィアに基づく」ものであった⁴²。前者は「饗応への招待や秘儀あるいは特別の密儀への参加を通して」形成され、それは容易に相手を裏切る傾向にあるが⁴³、「馴れ合い的な友情からではなく、自由人に相応しい教養を共に追求するという、協同の営みを通じて」醸成される同志関係は、「知性ある者にとって、気質や血の通う親族関係にもまして、より信頼するに足る、かけがえのないもの」になるという⁴⁴。実際『第七書簡』は、シケリアにおいてプラトンが展開した「フィロソフィアに基づく交流」の具体的次第を、臨場感溢れる筆致で詳述する。但しアルキュタスに師事するシケリア在住の者たちとプラトンの間には、「フィロソフィア」の内実を巡って、一種の軋轢が存在した⁴⁵。『第七書簡』が強調する両者の間の緊張関係を巡る構図は⁴⁶、プラトン哲学の由来をピュタゴラス学派に求める古来の主張に対する、一種の弁疏として機能するといえよう。

プラトン哲学の独自性を最も雄弁に物語る作品は、周知の如く『国家』である。「線分の比喩」および「洞窟の比喩」に集約される存在論・認識論・教育論を土台に、プラトンはフィロソフィアの秩序ある全体像を、一つの美しい体系として構築した。即ち、五つの数学的諸学科（数論・幾何学・立体幾何学・天文学・音階学）を哲学のための「前奏曲」に据え⁴⁷、それらの諸学問が相互に関連し合いながら描出する宇宙万有の不可視の秩序構造を認識し⁴⁸、ディアレクティケーによってヒュポテシスそれ自体を破棄しながら万有の起源に到達し、「善そのもの」を注視した後に再び俗世に立ち戻り、「各人が順番に国家と個々人と自分自身とを秩序づける仕事のうちに残りの生涯を過ごすように」と強く促すプラトンは⁴⁹、ある意味において、ソクラテスが断念せざるをえなかった女神フィロソフィア神殿建設を完成させたとも解釈される。

さて、このフィロソフィアの神殿内部に目を転じ、その特徴を概観しよう。まず第一に、そこにはもはや、イオニア的自然探求の姿は存在しない。「感覚される事物の如何なるものについても、知識は成立しえない」というイタリア・エレア学派由来の託宣によって⁵⁰、感覚世界の質料因を追求する東方文化圏由来の「ペリ・フュセオース（自然探求）」は、古典後期アテナイの知的領土から追放されたともいえる。例えば、観測を重視するバビロ

⁴⁰ Plato, *Epistle VII*, 333e2-3.

⁴¹ Plato, *Epistle VII*, 334b5.

⁴² Plato, *Epistle VII*, 333e1-2.

⁴³ Plato, *Epistle VII*, 333e3-5.

⁴⁴ Plato, *Epistle VII*, 334b5-7.

⁴⁵ G. Lloyd (1990) : 161-167.

⁴⁶ Izumi (1999) : 43-85.

⁴⁷ Plato, *Rep.* 524d1-531d7.

⁴⁸ Plato, *Rep.* 532aff.

⁴⁹ Plato, *Rep.* 540a4ff.

⁵⁰ Plato, *Rep.* 533c7ff.

ニア流儀の天文学者は戯画的に「仰向けに遊泳しながら学ぶ人」に喩えられ、「その人は決して学び知ることはできないだろう... なぜなら彼の魂は断じて上ではなく、下の方を見ているからだ」と評されると共に⁵¹、彼が注視する「天空の可視的光景」は「見捨てられる必要」があった⁵²。天空に関する知識は、視覚によって得られるものではなく、あくまでも「ロゴスと思考」によって把握されなければならない⁵³。

このようなイオニア自然探求追放令と共に西方世界より神殿内部に招き入れられた一群の客人は、ピュタゴラス学派由来の 5 人のマテーマタである。彼女たち、即ち数論・幾何学・立体幾何学・天文学・音階学が相互に協力しながら描出する「数と図形と比例関係」に基づく宇宙万有の不可視の秩序構造は、可感的物質に彩られたイオニア的世界観の対極に位置するといえよう。その具体的内実は、彼女たちが携える『ティマイオス』や『エピノミス』に詳しい⁵⁴。

これら 5 人のマテーマタを付き従えて神殿内外を跋扈する女神は、ディアレクティケー（哲学的問答法）であった。彼女はアテナイの知的領土で主に活躍するが、その出自はイタリア・エレア方面であったと推察される⁵⁵。ディアレクティケーの役割は、周知の如く、以下の一節に集約されるだろう。

ディアレクティケーの行程だけが、ヒュポテシスを次々と破棄しながら、根源（アルケー）そのものに至り、それによって自らを完全に確実なものとする。そして、文字通り異邦の泥土の中に埋もれている魂の目を、穏やかに引き起こして、上へと導いて行くのだ。(Plato, *Rep.* 533c7-d3)

このようにディアレクティケーは、ピュタゴラス学派由来のマテーマタが立脚するヒュポテシスを次々と破棄することによって、西方イタリア方面の新しい学問体系が提供しえなかった、宇宙万有の不可視の秩序構造を更に超えるロゴスの地平を切り拓くと共に、上記引用箇所に見える「異邦の泥土」という表現が示唆する如く⁵⁶、東方先進文化圏に由来するイオニアの学問伝統を本質的に改革する役割をも担っていた。

このようにプラトンが建立したフィロソフィア神殿は、東方には古来のイオニア的自然探求を見据えつつ、また西方イタリア方面の学問思想新興勢力と緊張状態を孕みながらも

⁵¹ Plato, *Rep.* 529c1-3.

⁵² Plato, *Rep.* 530b7.

⁵³ Plato, *Rep.* 529d4-5.

⁵⁴ 『ティマイオス』が描出する宇宙論に関する再検討として和泉（2001）参照。また『エピノミス』に関しては和泉（2002）参照。

⁵⁵ アリストテレスの散逸した断片『ソフィステス』において、ゼノンにはディアレクティケーの考案者であると指摘されているという。D. L. 8. 57 参照。

⁵⁶ Adam (1963) : 141 によれば、この表現はオルフェウス教に由来するという。しかし東方文化圏とイタリア・シケリア方面の西方文化圏の緊張状態の構図を念頭に、古典後期アテナイのフィロソフィアの特徴を再考するという本稿独自の見取り図においては、「異邦の泥土」という文言は、文学的比喩表現の域に留まらず、地理的意味合いを実質的に持つと解釈される。

同盟関係を結ぶことによって、古典後期アテナイが誇る知的砦として機能したと思われる。またこの神殿は、前述した『第七書簡』からも伺えるように、プラトンが切望した「フィロソフィアに基づく、信頼できる同志の形成」にも大いに貢献し、歴史の実体として紀元前 387 年から後 529 年まで存続したプラトンの学園アカデメイアは、その一つの証左といえよう⁵⁷。

4. 結びにかえて

以上本稿は、古典期アテナイを取り巻く東西エーゲ海の古来の文化勢力地図を念頭に置きつつ、イオニア的自然探求に別れを告げたソクラテスの「第二の航海」の行方を、その志を引き継ぐプラトンの知的遍歴を辿りながら断片的に描出することを試みた。最後に、その航海の更なる行方を遠望しよう。

アテナイの知的領土にプラトンが構築したフィロソフィア神殿の、その内部に鎮座する数学的諸学科およびディアレクティケーの女神たちは、神殿外部を跋扈するグラマティケーやレートリケーと共に「自由人に相応しい教育 (*eleutheras paideia*)」を構成する二領域、即ち数学的四科（数論・幾何学・天文学・音階学）と言語的三科（文法学・弁論術・弁証術）の枠組みへと再編成され、以後 2400 年余に渡り継承される人類の知的伝統の根底に、深く根を下ろした。度々誤解を招く傾向にある上記の「自由人」という概念は、制度的身分階級を意味するものではなく、古典期アテナイにおいて彫琢された人間性を巡る基本的理念、即ち権威や多数者の通念や個人的欲望等々の「他者」に隷属することなく、自分で自分自身を統括し、総合的見地から「正しさ」に関する批判的吟味を説得的に展開しうる、自律した市民としての人間像を指示する⁵⁸。

女神フィロソフィアが統治する自由七科の構造は、例えば五世紀初頭のマルティアヌス・カペラ『フィロロギカとメルクリウスの結婚 (*De nuptiis Philologiae et Mercurii*)』あるいはカシオドロス『聖俗学芸教程 (*Institutiones divinarum et saecularium litterarum*)』にも投影され、さらに時は下り 12 世紀のシャルトル学派のティエリ『七書 (*Heptateuchon*)』や彼の弟子アラヌス・アブ・インスリス『アンティクラウディアヌス (*Anticlaudianus*)』の教育理念にも脈々と継承された⁵⁹。その表象としては、例えばシャルトル大聖堂のレリーフあるいは 12 世紀初頭のアルザス地方の女子修道院長ヘラートによる『歓びの庭園 (*Hortus Deliciarum*)』の図像等々が挙げられる⁶⁰。特にヘラートが描出する自由七科図絵の中心には、過去・現在・未来を見据える女神フィロソフ

⁵⁷ 1929 年から 1940 年の間に行われたアカデメイア発掘調査に関する初の概説的報告として Murray (2006) : 219-256.

⁵⁸ ギリシア的教養によって育まれる「自由人」の概念については、教育の本質を「縛めからの解放」の過程として描出する『国家』七巻の「洞窟の比喻」が端的に教示する。

⁵⁹ この問題に関しては、例えば廣川 (1985) : 320-347, 伊東 (2006) : 99-106 参照。

⁶⁰ Green ed. (1975).

ィアが鎮座し、その台座の下には「哲学者たち (*philosophi*)」という但し書きと共にソクラテスとプラトンが仲睦まじく机を並べる。この構図は、本稿が辿ったように、ソクラテスとプラトンによって構築された古典後期アテナイ固有のフィロソフィアの姿を如実に反映する。しかし感覚と質料因を重視するイオニア的自然探求は、前述したように、アテナイ的フィロソフィアの領土から、既に姿を消していた。その復権は、イオニア的学問伝統を排除せずに積極的に歓迎するマケドニアの文化政策を、リュケイオンの組織的活動を通して具現化したアリストテレスによって、やがて果たされることになる⁶¹。

【引用文献表】

- Adam, J. (1962) *The Republic of Plato* 2 vols. (Cambridge).
- Field, G. (1930) *Plato and His Contemporaries* (London).
- Fritz, K. von. ed. (1972) *Pseudepigrapha*, I (Genève)
- Green, R. (ed.); Michael Evans, Christine Bischoff, and Michael Curschmann (1979). *The Hortus Deliciarum of Herrad of Hohenbourg : A Reconstruction*. (London / Leiden).
- Gulley, N. (1972) 'On the Problem of the Platonic *Epistles*', in Fritz ed. (1972) 103-144.
- Izumi, C. (1999) 'Rethinking the Relationship between Plato and the Pythagoreans', *Jinbun Kenkyu Chibadaigaku* 28, 43-91.
- (2000) 'Did Plato actually meet Archytas?', *Jinbun Kenkyu Chibadaigaku* 29, 1-34.
- Lloyd, G. E. R. (1990) 'Plato and Archytas in the Seventh Letter', *Phronesis* 35, 159-174.
- Michaelson S.; Morton A. (1972) 'The new stylometry. A one-word test of authorship for Greek writers', *CQ* 22, 89-102.
- Murray, J. (2006) 'Searching for Plato's Academy, 1929-1940', *Mouseion* (Canada) 6, 219-256.
- Rosenmeyer, P. (2001) *Ancient Epistolary Fictions* (Cambridge).
- Thesleff, H. (1961) *An Introduction to the Pythagorean Writings of the Hellenistic Period* (Acta Academiae Abonensis, Humaniora 24, 3, Åbo).
- (1972) 'On the Problem of the Doric Pseudo-Pythagorica. An alternative Theory of Date and Purpose' in Fritz ed. (1972) 57-102.
- West, M. (1997) *The East Face of Helicon* (Oxford).
- 和泉ちえ (2001) 「Timaeus 31b4-32c4 再考：宇宙の身体の事実上の不滅性のテーゼと立体幾何学」『西洋古典学研究』49号 26-38.
- (2002) 「プラトン（偽書）『エピノミス』における数学的世界像」千葉大学『人文研究』31号 1-21.
- (2006) 「再考ソクラテス裁判：天空の事象に関する探求と不敬罪を巡る素描的試論」千葉大学『人文研究』35号 1-17.
- (2009a) 「アリストパネスと天文・幾何学の徒：ユートピア建設を巡る同志の系譜」『ギリシア喜劇全集月報5』10-14.
- (2009b) 「哲学とジェンダー」『岩波講座哲学 15』47-78.
- (2010) 「ペリパトス学派と哲学史の誕生：アリストテレス『形而上学』A巻のタレス像を巡って」*Studia Classica* 1, 95-120.
- 伊東俊太郎 (2006) 『十二世紀ルネサンス』講談社学術文庫.
- 廣川洋一 (1985) 「自由三学科の成立」『新岩波講座哲学 14』320-347.

⁶¹ リュケイオンの特異性については、例えば和泉 (2009b) 50ff.

II. ペリパトス学派と哲学史の誕生

— アリストテレス『形而上学』A巻のタレス像を巡って —⁶²

問題の所在

哲学研究を遂行するに際して先人たちの動向を巡る系譜論的通覧を重用したのは、前335年アテナイのリュケイオンに活動の場を求めた壮年期のアリストテレスとその取り巻き即ちペリパトス学派であった。周知の如くアリストテレス『形而上学』A巻（以下、*Meta. A* と略記）は、系譜論的考察を主旋律とする記念碑的哲学論考であり、そこに織り込まれたミレトスを起点とする哲学史は、古代の学説誌家を経て尚今日に至るまで、哲学者および哲学それ自体の系譜の正統性に関する権威ある枠組みとして君臨した。哲学者（φιλόσοφος）の呼称と共に古来学説誌に名を刻む者は皆、*Meta. A* に登場する哲学者群を核に据える一大系図へと直接間接的に収斂し⁶³、また哲学という営為の規範、即ち何が哲学であり何が哲学ではないのか、その線引きに関する一つの指標を哲学者の系譜に基づき端的に提示したのも *Meta. A* であった⁶⁴。

しかしペリパトス学派がアテナイに跋扈する以前、例えばプラトンの学園アカデメイアの設立に際しても、あるいはソクラテスの周囲に集う諸氏の交わりにおいても、そしてまたピュタゴラス学派の間でも、哲学的思潮の出自をミレトスのタレスにまで遡り系譜論的に鳥瞰し、その系図を同志間で共有する姿勢は皆無とあってよい。古代ギリシア世界における哲学者の連帯は、元来、師への敬愛あるいは理念および探求法の共有に基づく場合が常であり⁶⁵、その意味においても、哲学者の系譜の描出とその継承を声高に喧伝するペリ

⁶² 本稿は、*Studia Classica* 1 (2010) 95-120 頁に掲載した拙論に基づく。

⁶³ この問題に関しては、和泉ちえ (2009) 49-52 参照。

⁶⁴ 特に、始源（ἀρχή）を探求する学問として形而上学（Metaphysics）を規定し、また「自然探求」と「人間に関する探求」の峻別をソクラテスを分岐点に据える哲学者の系図に基づき提示する *Meta. A* は、自然科学と人文科学の双方を本質的に包含するフィロソフィアの基本構造を巡る史的展開の各々の局面に、折りに触れては深く影響を与え続けた。例えばヨーロッパ世界がはじめてアリストテレスの全体像と出会った12世紀ルネサンス以降、諸家の関心を集めたのは特に『形而上学』と『自然学』の2作品であり、そのラテン語訳および注釈書は、当時の哲学教育の礎となった。ギリシア的学問の伝搬経路に現れる主要論考の数々を紐解けば、その痕跡を容易に辿ることができる。この問題に関して Kretzmann, Kenny and Pinborg ed. (1982) に収録された Dod 45ff. および Lohr 80ff. の論考は、有益な基本的見取り図を提供する。

⁶⁵ 例えばピュタゴラス学派の連帯は「師ピュタゴラスに対する特別の敬愛とピュタゴラスの生き方の遵守」によって維持され（Pl. *Rep.* X 600b2-5）、またプロタゴラスやプロディオコスなどのソフィストを取り巻く弟子たちの連帯も「師への敬愛」に由来する（Pl. *Rep.* X 600d3-4）。またプラトン周囲の同志の絆は「馴れ合い的な友情ではなく、自由人らしい教養を共に追求するという、その協同活動を通じて」形成されることを志向した（Pl. *Epist.* VII 334b4-6）。しかしペリパトス学派に関しては、「師アリストテレスへの敬愛」を示唆する古代の証言は皆無であ

パトス学派の振る舞いは特異といえよう。

本稿は、*Meta. A* に登場する古代ギリシアの哲学史に焦点をあて、何故にペリパトス学派は系譜論的考察を重用したのか、その動機の在処を探ると共に、古代ギリシアの学説誌の伝統の中で一種の正典と化した *Meta. A* の哲学史それ自体の特殊性について、主に「哲学の始祖としてのタレス (*Θαλής μὲν ὁ τῆς τοιαύτης ἀρχηγὸς φιλοσοφίας*)」像を中心に序論的考察を試みる。

1. *Meta. A* に登場する「哲学の創始者としてのタレス」像

3 世紀前半の学説誌家ディオゲネス・ラエルティオスは『ギリシア哲学者列伝』(以下 D.L. と略記) の冒頭で以下のように述べる。

哲学の営みは、ギリシア人以外の異民族(バルバロイ)の間で起こったと言っている人たちがいる。即ち、ペルシア人たちのところにはマゴス(呪術師)がいたし、バビュロニア人やアッシリア人のところにはカルダイオス(占星術師)たちが、またインド人のところにはギムノソピステス(裸の行者)たちが、そしてケルト人やガラタイ(ゴール)人たちのところにはドゥリュイデスないしはセムノテオスと呼ばれる人たちがいたのであり、そのことはアリストテレスが『マギコス(マゴスの教え)』の中で、またソティオンが『哲学者たちの系譜』第 23 巻の中で述べているとおりだと彼らは言うわけである。(D.L. 1. 1)

タレスからエピクロスに至る 80 人余の哲学者の生涯を荒唐無稽な逸話の紹介と共に綴る D.L. は、思想的に中立なゴシップ収集本という表層の外観ゆえに史的信憑性という観点において従来研究者諸氏の間で等閑視される傾向にあるが、「哲学はギリシア人に端を発するのであり、哲学という名前そのものも、異民族の言葉で呼ばれることを拒否している (*μὲν ἀφ' Ἑλλήνων ἤρξε φιλοσοφία, ἧς καὶ αὐτὸ τὸ ὄνομα τὴν βάρβαρον ἀπέστραπται προσηγορίαν*)」(D.L. 1. 4) というディオゲネスの表明は、フィロヘレニスト(ギリシア愛好主義者)特有の思想信条の吐露として傾聴に値すると思われる。如何なる学派にも与みしないディオゲネスの生涯は古来多くの謎に包まれるが⁶⁶、彼が正真正銘のフィロヘレニ

る。ペリパトス学派の連帯に関しては、アカデメイアの場合とは異なり、タレスに遡る哲学者の系譜の嫡子として自らを位置づける系図作成に加えて、新興勢力マケドニアの援助を背景に展開する組織的活動(その顕著な例として *Hist. Anim.* や *Polit.*、あるいは *Meta. A* 993b3-4 に表明される「大きな成果をもたらすのは組織的共同作業 (*ἐκ πάντων δὲ συναθροισζομένων γίγνεσθαί τι μέγεθος*)」という活動形態)、更にはリュケイオン関係者によって頻繁に開催される酩酊を伴う宴会(Athen. VII 574d-548a)、またリュケイオンに所属するだけで付随する名声(Aulus Gellius *NA* II 18.8) 等々、この種の世俗的価値観の共有によって、ペリパトス学派の同志の絆が維持されたと本稿は推察する。左記に関する古代の諸証言の総覧として Lynch(1972) 68ff. 参照。

⁶⁶ デイオゲネス・ラエルティオスの知的背景に関する論考として Mejer (1978), Mansfeld

ストであり哲学のギリシア起源説を声高に主張したことは、D.L.を貫く思想の在処を理解する上で有益な手がかりといえよう。

しかしまた一方、上記引用箇所から明瞭に看取されるように、この種の素朴なフィロヘレニストの信仰告白に疑義を唱える当時の対抗勢力が、反論の根拠としてアリストテレスおよびソティオンによる哲学者系譜論を引き合いに出す事態は、ペリパトス学派流の哲学史編纂に内在する一つの志向性を端的に炙り出す。上記引用箇所において具体的に言及されたアリストテレス『マギコス（マゴスの教え）』あるいはソティオン『哲学者たちの系譜』は既に散逸しているが⁶⁷、それらはリュケイオンを拠点とするペリパトス学派の産物でもあり、D.L.が批判をこめて指摘するように、これらの書物は「哲学は異民族の間から起ったと主張する人々（τὸ τῆς φιλοσοφίας ἔργον ἐνιοὶ φασιν ἀπο βαρβάρων ἀρξάει）」(D.L. 1.1; 1.6)の歴史認識を許容したと推察される。

かかる状況を鑑みるにつけ、ペリパトス学派の哲学研究マニフェストともいえる *Meta. A* に織り込まれた哲学史が、当時学派内に流布した「哲学の異民族起源説」と無縁であったとは想定し難い。その意味においても *Meta. A* に登場する哲学史は、現在に至るまで哲学研究の正統的枠組みを構築しこそすれ、その実質的内容は特殊であったといえよう。その一端を象徴するのが、*Meta. A* に突如現れる「哲学の創始者としてのタレス」像である。

Meta. A 以前のタレス像

Meta. A 983b6 以下の議論においてアリストテレスは「最初に哲学に従事した人々の大半は質料という観点で俎上に上るもののみが万物の始源であると考えた」(983b6-7)と語り、「この種の哲学の創始者としてのタレス（Θαλῆς μὲν ὁ τῆς τοιαύτης ἀρχηγὸς φιλοσοφίας）」(983b20-21)に言及する。しかし *Meta. A* 以前の文献資料を精査する限り、「哲学の創始者（ὁ ἀρχηγὸς φιλοσοφίας）」という肩書きをタレスに付与する証言は現存せず⁶⁸、また哲学研究の源泉に特定の人物を「創始者（ἀρχηγός）」として据える慣行も存在しない⁶⁹。哲学

(1986)297-382 等が有益な見取り図を提供する。

⁶⁷ しかし D.L. 5. 1. 22-27 に収録されたアリストテレスの著作目録には、*Περὶ Μάγων* は含まれていない。Suda(s. v. Ἀντισθένης)によれば、この作品はアンティステネスに由来するという。但しアリストテレスの断片『哲学について（*Περὶ Φιλοσοφίας*）』に関する古代の証言の中に、アリストテレスによるマゴスへの言及が登場する(Plin. *NH* 30. 3)。この問題に関する基本的諸証言の総覧として、Jaeger (1963)125ff., Guthrie(1981)82ff., Jong(1997)205ff. 等参照。

⁶⁸ TLG 検索によれば「哲学の創始者（ὁ ἀρχηγὸς φιλοσοφίας）」としてのタレス像は、アリストテレス *Meta. A* 以前には現れない。但しアリストテレス以降、「創始者・元祖（ἀρχηγός）」という用語と共にタレスが登場する箇所は *Meta. A* に関する後代の注釈書に限定される。例えば Alex. *Comment. Arist. Meta.* 24. 9, Ascle. *Comment. Arist. Meta.* 24. 37 等々。通常、アリストテレス以降の古代の学説誌家たちは、タレスの事績を紹介する際「創始者・元祖（ἀρχηγός）」という系譜論的意味合いを強く帯びる言葉を用いず、「初代（πρώτος）」という一般的表現を用いる場合がほとんどである。例えば Theoph. *Phys. Opini.* 1. 1, Stob. *Anth.* 1. 26. 2, 1. 49. 1a, Aet. *Plac. Phil.* 4. 2. 1, Simp. *Comment. Arist. Phys.* 23, 29, 等々。

⁶⁹ TLG 検索によれば、*Meta. A* 以前に哲学の始祖を「ἀρχηγός」という言葉で言及する事例は皆無である。*Meta. A* に関する古代の注釈書を除き、特定の哲学者を「ἀρχηγός」として位置づけ

の創始者としてのタレス像は、この二つの観点において、斬新かつ特異な提案であった。

さて、ここで今一度 *Meta. A* 以前の文献資料を振り返り、「哲学の創始者」としてのタレス像を導出しよう。古来の証言が果たして存在するのか否か、検討を加えたい。

まずプラトン諸対話篇に現われるタレスの姿を概観しよう。例えば『テアイテトス』には、タレスに纏わる以下の有名な逸話が登場する。それによれば、天文研究に取り組むタレスは、上方を注視する余り井戸に落ち、トラキア出身のウィットに富む快活な女中はタレスを揶揄し『あなたは天空の事象を認識することには熱心だが、自分の目の前や足元のことには無頓着ですね』と語ったと伝えられる (*Theaet.* 174a4-8)。このエピソードは、天文研究と哲学研究の類比的対応関係を介して、「同じ冗談話は哲学に従事する者すべてにも向けられる」(*Theaet.* 174a8-b1) という一つの教訓を導く。またこの文脈においてプラトンは、注意深く意図的に天文研究と哲学研究の間に一線を画しており⁷⁰、『テアイテトス』に登場する「天文研究に没頭するタレス」は、あくまでも哲学者の類型としての天文・幾何学者像の域に留まり、*Meta. A* に現れる「万物の根源は水である」という説を唱えた「哲学の創始者」としてのタレス像に、必ずしも直結するものではない。

またプラトン『プロタゴラス』が提示する七賢人の最古のリストの中に「ミレトスの人タレス」の名も含まれる⁷¹。しかし『プロタゴラス』では、彼ら七賢人はあくまでも「スパルタ人の教養の崇拜者であり、熱愛者であり、かつその弟子であった」と一括されており (*Prot.* 343a5-7)、七賢人横並びの枠組みの中からタレスが単独で「哲学の創始者」として浮上する気配はない⁷²。

更に『国家』X 巻の中でタレスは、「賢者の功績のような、技術あるいはその他の実践的行為における多くの発明や創意工夫」に貢献した人物の一人としてスキュティアの人アナカルシスと共に言及されるが (*Rep. X.* 600a4-7)⁷³、ここで強調されるのは技術知に長けた

る事例としては、例えば *Sext. Emp. Adv. Math.* 7. 16. 5 (プラトンに対して)、9. 4. 4 (ホメロスに対して)、9. 366. 5 (ピュタゴラスに対して) 等々がある。

⁷⁰ *Theaet.* 174b4-6 において哲学研究の対象は「人間の本質 (*τί δέ ποτ' ἐστὶν ἀνθρώπος*)」であることが明示されており、一方タレスが没頭する天文研究の対象は、あくまでも「天界の事象」に限定されている。

⁷¹ *Prot.* 343a2-5 に登場する七賢人とは「ミレトスの人タレス、ミュティレネの人ピッタコス、プリエネの人ピアス、我々と国を同じくする (アテナイの) ソロン、リンドスの人クレオブウロス、ケナイの人ミュソン、スパルタの人キロン」。また、古代の諸証言に登場する七賢人のリストには若干変動がみられるが、タレス・ピアス・ピッタコス、ソロンの4名は不動である (D. L. 1. 40ff.). 七賢人に関する基本的研究として、Barkowski (1923) in Pauly-Wissowa *RE* 2 A/2, s. v. 'Sieben Weise' 2242-2264, Wilamowitz-Moellendorff (1890) 196-227 等参照。

⁷² 但し *Pl. Hp. Ma.* 281c4-6 では、ミレトスの人タレスが同じく七賢人に属するピッタコスおよびピアスと共に「知恵ゆえにその名が大きく喧伝されている、あの昔の人々」として言及される。また、*Pl. Epst.* II. 310e5ff. では「見識 (*φρόνησις*) と権力 (*δύναμις*) の歩み寄り」の典型例として「ペリクレスとアナクサゴラス」あるいは「賢者としてのクロイソスおよびソロンと権力者としてのキュロス」の関係と相並んで「コリントス人ペリアンドロスとミレトス人タレスを同時に讃美する習慣がある」(311a5) という記述がみられる。

⁷³ アナカルシス (前6世紀前半) の功績として、錨や轆轤の発明がある (D. L. 1. 101-5)。

タレスの姿であり、それは *Meta. A* が提唱する「哲学の創始者」としてのタレス像には程遠い。

このようにプラトン諸対話篇に現われるタレスの姿は、アリストテレス *Meta. A* のタレス像と直接接点を結ぶことはなく、タレスに寄せる関心および評価という観点においても、アリストテレスとプラトンは袂を分かつといえよう。また両者にとって当時入手可能であったタレスに纏わる文献資料あるいは伝聞それ自体が、元来異なるものであった可能性も十分想定されるが、その検証は折をあらためなければならない。

さて次に、タレスに関する逸話を収録する現存史料として最も古いヘロドトス『歴史』（以下 Hdt. と略記）を概観しよう。タレスが登場するのは Hdt. 第 1 巻に限定され、以下の三種の逸話が紹介される。その一つは、前 6 世紀前半のリュディアとメディアの戦いの最中に起こった皆既日食を「ミレトスのタレスがイオニア人のために正確に予言していた」（Hdt. 1. 74）という、タレスの天文研究の成果を称賛する逸話である⁷⁴。この事績は、上記言及したプラトン『テアイテトス』の中の「天文研究に没頭するタレス像」にも通底し、天文学とタレスを結ぶ密接な関係を物語るといえよう⁷⁵。

第二の逸話として Hdt. が言及するのは、タレスの治水技術の高さを物語る「ギリシア人たちに広く流布する伝承（*ὁ πολλὸς λόγος Ἑλλήνων*）」であった（Hdt. 1. 75. 3）。それによれば、リュディア王クロイソス率いる軍隊がハリュス川を渡河するに際して、「陣営に同行していたタレス」が高度な治水技術を駆使し、「クロイソスのために軍の左手に流れていた川を右手にも流れるよう運河を掘り」、その結果「川は二分され徒歩で渡河可能になった」という（Hdt. 1. 75）。当時ギリシアで人口に膾炙していた伝聞は、「*Θαλῆς οἱ ὁ Μιλήσιος διεβίβασε*（タレスが軍を渡河させた）」という端的な表現によって（Hdt. 1. 75. 3）、ミレトスの人タレスの功績を強調する⁷⁶。またこの逸話は、上記言及したプラトン『国家』X 巻に現われる「技術あるいはその他の実践的行為における多くの発明や創意工夫を考案した人物」としてのタレス像とも呼応する。

Hdt. が紹介する第三の逸話は、行政統治に関するタレスの提言に纏わるものであった。

⁷⁴ この日食は、前 585 年 5 月 28 日の出来事であることが判明している。タレスの日食予報は、バビュロニアの膨大な天体観測データに由来する日食の周期性の研究に基づくが、予報の精度は低いと従来指摘されてきた。Kahn(1960)76, Dicks(1970)41-42 等々参照。しかし近年、タレスの日食予報の方法論を巡って、通説を覆す様々な再検討が行われている。例えば Hartner(1969), Panchenko(1994), Fatoohi(1997), O'Grady(2002), Couprie(2004) 等々参照。

⁷⁵ *KRS*(1983)87 によれば、シンプリキオスの証言 (*Simpl. Comm. Arist. Phys.* p. 23, 29 Diels) に基づき「アレクサンドリアの図書館が所蔵していたタレスの著作は、唯一『航海用天文誌 (*Ναυτικῆς ἀστρολογίας*)』であったことは明白である」という。また D.L. 1. 23 の証言によれば、『航海用天文誌』以外のタレスの著作として古代組上に上ったのは『太陽の回帰について』と『春分・秋分について』であった。いずれにせよ古代の諸証言が指摘するタレスの著作が全て天文研究の領域に限定されることは、当時のタレス像を理解する上で重要な指針となる。また一方、タレスは全く書物を著さなかったという可能性も指摘されている。*KRS*(1983)88 参照。

⁷⁶ 但しヘロドトスは、この伝承に懐疑的であり、リュディア軍の渡河はタレスの功績によるものではなく、「既に当時架かっていた橋のお陰」と反論している（Hdt. 1. 75. 3）。

それによれば、「イオニア人は統一評議会を組織し、その設置場所はイオニアの中央に位置するテオス島に定め、その他の諸都市はそのまま自治を認められ、いわば地方行政区として存続する」よう「フェニキア人を祖先に持つタレス」が「イオニア人に勧告を与えた」という (Hdt. 1. 170).

このように Hdt. が描出するタレスの活躍は、第一に日食の予測、第二に高度な治水技術、そして第三に行政統治に関する提言という、国家公共の事柄に関する実践的分野に特化されており、これらの逸話から、アリストテレス *Meta. A* に現われるタレス像、即ち万物の始原を探求する「哲学の創始者」としてのタレス像が生まれる可能性は限りなく低い。

以上確認したように、現存する *Meta. A* 以前の文献資料には、「哲学の創始者」としてのタレス像を示唆する証言は存在しない。では一体何故にアリストテレス *Meta. A* においてタレスは突如脚光を浴び、七賢人の枠組みから一人切り離されて、哲学の始祖に据えられたのか。かかるタレス像が生成した経緯を考察するために、本稿が手がかりとして着目するのは、ペリパトス学派に内在する系譜論的志向性である。この問題について、次章で考察を展開しよう。

2. ペリパトス学派と系譜論

既に上記言及したように、ペリパトス学派は哲学史編纂に強い関心を示すと共に、アリストテレス『マゴスの教え』や『哲学について』あるいはソティオン『哲学者たちの系譜』が示唆する如く、哲学の起源をギリシア人以外の異民族に求める歴史観を許容していた。このようなペリパトス学派の姿勢は、彼らを取り巻く当時の政治力学を反映すると思われる。

ペリパトス学派の形成は、前 336 年アレクサンドロス大王即位を機にアテナイに舞い戻ったアリストテレスが、嘗て 20 年間慣れ親しんだプラトンの学園アカデメイアと袂を分かち、新たにリュケイオンに学問活動の拠点を求めたことに端を発する⁷⁷。新興勢力マケドニアの支援を受けながら、ペリパトス学派は多岐に渡る見聞録および各種の学問諸成果を組織的に収集整理し、リュケイオンの知的共有財産として蓄積した⁷⁸。その意味においてリュケイオンは、マケドニアの学問振興政策の一翼を担っていた、という解釈も十分可能であると本稿は提案したい。

またペリパトス学派の大半は、アテナイ市民権を持たない在留外人であり、そこには非ギリシア人や女性が含まれることはなかった⁷⁹。このような外様集団ペリパトス学派が、

⁷⁷ リュケイオン誕生の経緯を巡る D.L. をはじめとする古代の諸証言については、Lynch (1972) 68-75 による総覧が有益である。

⁷⁸ プラトンの学園アカデメイアを特徴付けるのは、ディアレクティケーによる交流 (*συνουσία*) であったが、アリストテレスのリュケイオンは組織的協同作業 (*κοινωνεῖν*) によって特徴付けられる。この点に関する総覧として Lynch (1972) 83-90 参照。

⁷⁹ Lynch (1972) 92-93, Jaeger (1948) 316. 非ギリシア人に対するペリパトス学派の閉鎖性に関

「全ギリシア世界の知恵の殿堂 (τῆς Ἑλλάδος τὸ πρυτανεῖον τῆς σοφίας)」としての文化的矜持を誇る学都アテナイで⁸⁰、新興国マケドニアの財力を背景に組織活動を展開する光景は、反マケドニアの立場を表明するアテナイの知識人たちにとって、不快感を誘発するものであったと思われる⁸¹。

このような当時の情勢を鑑みるにつけ、ペリパトス学派が哲学史編纂に強い関心を示した背景の一つには、アテナイを中心とするギリシア世界の知的伝統即ちフィロソフィアの営みの系譜の中にリュケイオンの活動を新たに組み込み、ギリシア的学問文化の継承者としてペリパトス学派の正当性を内外に証明する必要があったのではないかと本稿は推察する。ペリパトス学派は、自らを正統的継承者に据える古代ギリシアの哲学史を編纂することによって、アテナイを中心とするフィロソフィアの祭典の中にはじめて正式に参画し、それと同時に彼らの後ろ盾でもある新興勢力マケドニアもまた、ギリシア世界の知的伝統の正統的継承者として、以後ヘレニズム文化史の表舞台へと躍り出ることになる。系図作成即ち系譜論的視座に基づく歴史編纂とは、実質的には、新たな政治力学を反映する学問文化勢力地図の作成でもあった。そして特にマケドニアに縁ある人々は、ヘロドトスが伝える以下の逸話が示唆する如く、この種の系図作成の効用を知悉していたと思われる。

ヘロドトスによれば (Hdt. 5. 22), かつてマケドニアの歴代の王たちはギリシア人を自称しこそすれ異民族とみなされて、オリュンピア競技に参加することも許されなかったが、それを可能にしたのは「血統による証明」であったという⁸²。即ちマケドニア王に紛れもなくギリシア人の血が流れていることを証明する系図の作成こそが⁸³、異民族マケドニア

しては、例えば Martin and Lynch(1994)640 参照。また何故にペリパトス学派が女性に対して排他的であったのか、この問題に関する論考として和泉 (2009) 参照。

⁸⁰ 「全ギリシア世界の知恵の殿堂 (τῆς Ἑλλάδος τὸ πρυτανεῖον τῆς σοφίας)」という表現を用いてアテナイを称賛する論調は、前 5 世紀後半のペロポネソス戦争前夜の知識人の動向を描写する Pl. Prot. 337d5-6 に登場する。アリストテレスがリュケイオンを創設した前 4 世紀後半のアテナイの文化的矜持もまた依然として「哲学 (φιλοσοφία)」という名辞に依存する傾向は、例えば Isoc. Phil. 84-85, Antid. 224 等からも看取される。

⁸¹ 例えば前 4 世紀のソフィスト・テオクритスは反マケドニアの立場を表明し、アリストテレスに対する揶揄をエピグラムに表した。またティモンもアリストテレス批判を展開している。アリストテレスに対する罵詈雑言の一端は D. L. 5. 11 参照。リュケイオンおよびマケドニアに対するアテナイ人の反感について、Düring (1957) 373-95, Lynch (1972) 152-3. Lawton (2003) 117-27 等参照。

⁸² ギリシア世界の一員としてマケドニアが認知されオリュンピア競技に参加できたのは、アレクサンドロス 1 世統治下の前 500 年頃といわれている。

⁸³ マケドニア王国の血統がギリシア人に由来することを証明する系図の具体的内容の一端は Hdt. 8. 137-9, 9. 45 で言及される。この系譜は、Thucy. 2. 99, 5. 80 においても肯定的に記載されており「マケドニア王国は、古くはアルゴスの有力一族テーメニダイ族に連なる」と詳述される。しかし前 341 年、アテナイにおける反マケドニア論の急先鋒デモステネスは、マケドニア王フィリッポスに対する弾劾演説の中で「フィリッポスは、ギリシア人でもなければ、ギリシア人とは一切血縁関係を持つこともなく、しかも出身地を憚る必要がない部類の異民族でもなく、以前にはまともな奴隷さえもその土地から購入することが不可能であったような、マケドニア出身の卑賤な奴なのだ」(Demosth. Phil. III. 31) とマケドニア人異民族説を復活させてフィリッポスに罵詈雑言を浴びせていることも、マケドニア寄りのアリストテレスを取り巻く

人をギリシア人に変身させたといえよう。この逸話が象徴するように、ギリシア世界の辺境マケドニアにとって、系譜論的証明はきわめて重要な意味を持っていた。

マケドニアに縁深いアリストテレスもまた同様に、系図および始祖 (ἀρχηγός) を重要視する。アリストテレス断片『生まれのよさについて』の中に、以下の言説が登場する。

生まれのよさとは、家柄の卓越性なのであって、そのような家柄から生まれた人々は生まれがよいのである。しかしそれは、その人々の父が生まれがよいのではなく、その家柄の始祖 (ἀρχηγός) が良き生まれであればそうなのである。なぜなら父が立派な子を産むのは、自らの力によるものではなく、彼がこのような家柄 (始祖に連なる血統) に属しているからである。(アリストテレス『生まれの良さについて』4, Stob. 4. 29 C 52)

アリストテレス『生まれの良さについて (Περὶ Εὐγενείας)』は既に散逸しており、後4世紀後半から5世紀初頭にかけて活躍したマケドニア出身の学説誌家ストバイオス『詞華集 (Florilegium)』に断片的引用が収録されているが、それによればアリストテレスは家柄や血統を大いに尊重し、「生まれの良さ」に関する価値基準を、系譜の起点に鎮座する始祖 (ἀρχηγός) 一人の卓越性に求め、その重要性を主張していたことが伺える。解説を加えるならば、系統樹の質の良さを左右するのは、生い茂る枝葉に現れる数多の先祖の顔ではなく、あくまでもその幹を支え樹木に生命力を付与し続ける源泉としての「始祖 (ἀρχηγός)」の本性的力こそが最も重要なのであった⁸⁴。

このようなアリストテレスの見解は、神々の系譜や民族の系図を重用する古代ギリシア世界古来の一般通念を代表するともいえようが、その対極に位置する議論を展開したのは、リュコフロンやエウリピデスなどのアテナイに縁の深い知識人達であった。例えばリュコフロンは、家柄の良さなど「全く無意味 (κενόν τι πάμπαν)」と語り⁸⁵、またエウリピデスは「生まれの良さとは、由緒ある血統に由来するのではなく、本人自身が端的に立派であることに尽きる」と述べたという⁸⁶。このような論調は、「αὐτόχθων (大地から生まれた人間)」概念をアテナイの建国神話に導入し、ギリシア世界古来の系譜論的しがらみを実質的に払拭しようと試みた前5世紀アテナイの精神風土を象徴するものといえよう⁸⁷。そ

当時のアテナイの状況を再考する上で、看過すべき状況ではないだろう。

⁸⁴ アリストテレス『生まれの良さについて』(Fr. 4)の中で「始祖 (ἀρχηγός) は、自分自身と同じ多くのものを生み出す力を持っている」と述べ、「始祖 (ἀρχηγός) こそは他のあらゆるものにまさる力を有しており、…自分と同質のものを多数産み出す本性的力を持つ (ἔχῃ δύναμιν τῆς φύσεως ὡς τίκτειν πολλοὺς ὁμοίους)」と礼賛する。但しこの種の始祖 (ἀρχηγός) の本性的力の例証としてアリストテレスが言及するのは「馬の血統」をはじめとする「動物の場合」であった。アリストテレス的思考法の特徴がここにも現れている。

⁸⁵ Stob. 4. 29 A 24.

⁸⁶ Stob. 4. 29 C 53, Eur. Fr. 345 Nauck.

⁸⁷ アテナイ人の由来を他民族に遡る系譜論的視座で規定するのではなく、アテナイの土地が産み出した「αὐτόχθων (大地から生まれた人間)」として描出する思潮は、前5世紀前半のペルシア戦争後に、顕著にアテナイに流布したという。古来アテナイは「イオニア人の土地」と

の最左翼の牙城ともいえるプラトンの学園アカデメイアは、それゆえ当然のことながら、敢えて固有のギリシア哲学史を編纂することはなく、またそれとは対照的に、マケドニアに縁深いアリストテレスのリュケイオンに集うペリパトス学派の面々は哲学者の系図作成に勤しんだ⁸⁸。この状況は、系譜論的価値観を巡る当時の二大潮流の相克を反映すると思われる。

以上、ペリパトス学派に内在する系譜論的志向性の一側面、即ち哲学史編纂に寄せる彼らの強い関心の由来について、系譜論的説明を重用するマケドニア的通念およびアリストテレス『生まれの良さについて』から看取される「始祖（ἀρχηγός）尊重」の主張を手がかりに概観した。しかし、ペリパトス学派が継承する哲学の系譜の「生まれの良さ」の証として、何故にミレトスの人タレスを「哲学の始祖」に据えたのか、依然として謎は残る。この問題を実証的に検討するための文献学的論拠は極めて乏しく、これ以上立ち入ることは控えるべきと思われるが、傍証を辿りながら、一つの憶測として以下の議論を展開したい。

3. 哲学の起源を巡るせめぎ合い：ギリシア人 vs. 異民族

哲学の系譜を概観する試みは、確かにペリパトス学派以前にも単発的に散見される。それらの個別的特徴および傾向を辿っていこう。

例えばプラトン『プロタゴラス』で展開される詩人シモニデスの詩句解釈を巡る議論の中で、「フィロソフィアの営みは、ギリシア人たちの中では、クレタとラケダイモンにおいて最も古くから、また最も盛んに行われている」（342a2-b1）という系譜論的認識が紹介される。それによれば、タレスを含む七賢人たちもまた「いずれもそろってスパルタ人の教養の崇拜者であり、熱愛者であり、かつその弟子であった」（343a5-6）と括られる。この見取り図は、前5世紀アテナイ知識人たちの間に流布した「ラコノマニア（スパルタ愛好主義）」の思潮を反映すると思われるが⁸⁹、哲学の起源がアテナイではなく「クレタやスパルタ」に求められ、またミレトスの人タレスに関しては、あくまでも七賢人の枠組みを逸脱することなく、しかもスパルタ的哲学の継承者として位置づけられたことは注目に値する。またプラトン『テアイテトス』あるいは『クラテュロス』には、ヘラクレイト

言われていたが（Solon fr. 4, Hdt. 1. 56. 2, 1. 143. 2, Thuy. 7. 57. 2），ペルシア戦争以降アテナイでは、反イオニアの風潮と共にギリシア世界の他の地域との類縁を示唆する系譜論的枠組みからの脱却が各方面で主張された。このような観点での *ἀπόχθων* の初出は Aeschyl. *Agamemnon* 536 であり，Hall (1997) 51ff, Thomas (2001) 225-31 等が有益な概説を提示する。また当時のアテナイにおける民主主義を取り巻くイデオロギーとの関連で *ἀπόχθων* を扱う論考として，例えば Rosivach (1987) 294-306 等参照。

⁸⁸ ペリパトス学派による史的編纂として，テオフラストス『自然学者たちの学説』，エウデモス『幾何学史』『天文学史』『神学史』，アリストクセノス『音楽論』，メノン『医学史』等がある。エウデモスの史的編纂に関しては Mejer (2002) 243-261, Zhmud (2002) 263-306, Bowen (2002) 307-22 等を参照。またリュケイオンでの史的編纂に関する論考として Zhmud (2006) 117ff.

⁸⁹ 当時のラコノマニアに関する論考として Cartledge (2001) 106-126.

スが提唱する万物流転説の源流にホメロスやヘシオドスそしてオルフェウスの「古来の知恵」を据える系譜論的解釈が登場する⁹⁰。思想の源流をホメロスの詩句に遡り説明する手法は、系譜論者の流儀に通じた当時のソフィスト・ヒッピアスに由来すると指摘される⁹¹。更に『国家』『ティマイオス』『クリティアス』の3部作が描出するアテナイ中心史観も等閑視されるべきではない。『ティマイオス』冒頭に紹介されるソロンを巡る逸話は、アテナイとエジプトの緊密な関係およびエジプト古来の知的伝統に対する敬意を表明しながらも、エジプトに対するアテナイの文化的優位性を主張し、『国家』および『クリティアス』の構想と相俟って、宇宙創造論的視野での人間の誕生、国家の誕生、学問文化の誕生の起源をアテナイに求め、その卓越性を讃美する大規模な系譜論的構想として解釈される⁹²。

このように、前5世紀後半から前4世紀前半にかけて「全ギリシア世界の知恵の殿堂」を標榜するアテナイで物語られた哲学の断片的系譜は、フィロソフィアの営みをギリシア人の文化的本質規定に深く関与するものとして喧伝し、その起源もまた、アテナイあるいはラケダイモンあるいはクレタなどの複数の候補があるにせよ、いずれもギリシア世界の内側に限定されるものであった。

しかしプラトン最晩年期のアカデメイアの動向を反映する『エピノミス』には⁹³、哲学の起源に関して、上記言及した諸対話篇から看取されるギリシア世界中心史観とは異なる視点が現れる。哲学を構成する諸学科の中で重要な役割を果たす天文学の起源について⁹⁴、『エピノミス』に登場するアテナイからの客人は「(天体の諸軌道を)はじめて観測したのは異民族であった(*ὁ πρῶτος ταῦτα κατιδὼν βάρβαρος*)」と明言し(*Ep.* 986e9)、具体的には「エジプトやシリア」の人々であったと言及する(*Ep.* 987a2)⁹⁵。彼らは「雲や雨に遮られることなく常に全天の星々を観測することが可能」であり(*Ep.* 987a3-5)、その成果は「幾千年もの無限の時間の検証に耐え、あらゆる方角に伝搬し、ここ(ギリシア)にも到達した」という(*Ep.* 987a6-8)。更に『エピノミス』には「ギリシア人は、異民族から継承したものを、それが何であれ最終的には、より優れたものへと仕上げる」(*Ep.* 987e1-2)という指摘も登場するが、この「ギリシア人は異民族からの継承した(*Ἕλληνες βαρβάρων παραλάβωσι*)」というモチーフは、前5世紀後半から前4世紀前半のアテナイに渦巻くギリシア・アテナイ中心史観が封印し続けた歴史認識でもあった。『エピノミス』は、この

⁹⁰ Pl. *Theaet.* 152e3ff, 160d7ff, 179e3ff, *Craty.* 401d4ff.

⁹¹ Snell (1924) 119によれば、ホメロスに遡る系譜論の中でヘラクレイトスの思想を解釈する手法は、ヒッピアスの *Synagoge* に基づくもので、プラトンそしてアリストテレスは、この書物を参照していた可能性が高いという。

⁹² しかしこの構想は、『クリティアス』が未完に終わったことで頓挫する。

⁹³ 『エピノミス』をプラトン諸対話篇に含めるか否か、その真偽問題に関する総覧として Tarán (1975) 3-42.

⁹⁴ 哲学を構成する諸学科の中で、特に天文学が別格に扱われる傾向が看取されるのは、例えば Pl. *Tim.* 27a3-5, *Laws* 964a2-3, *Epin.* 990a2-5 等々。

⁹⁵ Arist. *Cael.* 292a7-8 においても「星々について昔から長きに渡って観測してきたエジプト人やバビュロニア人たちから、我々は多くの信賴すべき事実を得ている」という言説が登場する。

「異民族からの継承」という視点をあらためて承認し共有することを意図的に促しており⁹⁶、『エピノミス』の成立年代として想定される前4世紀中葉のアカデメイアにおいて、文化史的観点での歴史認識に何らかの変化が生じていたことが伺える。

続く前4世紀後半のアテナイ・リュケイオンに集うペリパトス学派は「父祖や先人たちの見解」を大いに尊重し、その系譜編纂に関心を寄せた。ペリパトス学派は、「父祖や先人たち」をアテネを中心とするギリシア世界に限定せず、「数学的諸学科の発祥地エジプト⁹⁷」や東方文化圏に帰属する「遙か昔に神々のことを語った人々⁹⁸」に目を向ける。ペリパトス学派は、異民族由来の知的遺産を包含する一大文明地図を念頭に置いていたと推測され、その文化史的射程は、アレクサンドロス大王の東方遠征と無関係ではない。

しかし「異民族からの継承」というテーゼを前提に据え、ギリシア人の文化的起源を説明する歴史認識は、既に前5世紀中葉にハルカリナッソス出身のヘロドトス『歴史』が提唱するものでもあった。ヘロドトスによれば「1年という単位を発明したのはエジプト人であり、1年を季節によって12の部分に分けたのもエジプト人が史上最初の民族」であり(Hdt. 2.4)、「暦の計算方法はエジプト人のほうがギリシア人よりも合理的である」(Hdt. 2.4)と述べ、また「幾何学もエジプトで発明され、後にギリシアに伝搬した」(Hdt. 2.109)という。また「日時計やグノーモン、1日の12分法については、ギリシア人はバビュロニア人から学び」(Hdt. 2.109)、また「文字についてギリシア人はフェニキア人から習い覚えた」(Hdt. 5.58)という。

このようにヘロドトスは、ギリシア文化の異民族起源説、特にエジプト人、バビュロニア人、フェニキア人などの異民族からギリシア人が学問文化を継承したことを、イオニア的ヒストリエーの成果として描出し、ギリシア・アテナイ中心史観とは一線を画するギリシア文化の異民族起源説を、実質的に論証したともいえよう。ヘロドトス『歴史』冒頭の序が的確に説明するように、その探求対象は基本的には「人間たちに由来する出来事(τὰ γινόμενα ἐξ ἀνθρώπων)」と措定されるが(Hdt. proem)、それらは実質的に「ギリシア人に由来するもの(τὰ μὲν Ἑλληνισι)」と「異民族に由来するもの(τὰ δὲ βαρβάρουσι)」の双方から構成されることを補足的に強調する下りこそ(Hdt. proem)、ヘロドトスの歴史観を理解する上で重要と思われる。

しかし後代、プルタルコス『ヘロドトスの悪意について(De Herodoti malignitate)』の中で、上記歴史観を展開するヘロドトスを「異民族愛好者

⁹⁶ 「異民族からの継承」というモチーフは既成事実として共有されていたのではなく、議論の前提に据えることを勧奨する一つのテーゼであったことは *Epin.* 987e1-2 に現れる ‘λαβῶμεν ὡς ... (we shall assume that ...)’ という表現から看取されるだろう。‘λαβῶμεν’ の主語は「我々ギリシア人」だが、*Epin.* に登場する3人の対話者は、アテナイからの客人、クレタ人の老人クレイニアス、スパルタの老人メギロスであり、クレタやスパルタは、本稿で既に言及したように『プロタゴラス』の中で「哲学発祥の地」として称賛された地域であった。

⁹⁷ *Meta.* A 981b24-5.

⁹⁸ *Meta.* A 983b20, *Meta.* B 1000a9, *Meta.* A 1074b2, *Cael.* 270b5-9, 284a2-13, *Meteor.* 339b19-30.

(φιλοβάββαρος)」と呼び批判する (*De malig.* 12) . プルタルコスとは本質的にフィロヘレニスト (ギリシア愛好主義者) であり⁹⁹, ギリシア中心史観が排除する傾向にある「異民族の事績」や「ギリシア文化の異民族起源説」を淡々と綴るヘロドトスに反発を覚えるのも故なきことではない. また一方, プルタルコスによるヘロドトス批判こそ「悪意にみちた不当なものである」, と逆に糾弾する論調もみられるが¹⁰⁰, 前 5 世紀アテネを中心に渦巻くギリシア中心史観の背景には, ペルシア戦争に端を発する「異民族からの決別」を目指すギリシア本土側の志向性が投影されていると推察され, またその対極に位置する「ギリシア文化の異民族起源説」を肯定的に論証するヘロドトスの動機には, 非ギリシア人の父を持つペルシア帝国支配下のギリシア植民都市ハルカリナッソス出身の知識人ならでは, ギリシア本土の論理に対する反骨精神が介在すると本稿は憶測する.

それでは一体ヘロドトスは, 『歴史』第 1 巻にその活躍を活写するタレスに関して, 如何なる民族意識を付与しているのか. 即ち, ヘロドトスはタレスの事績を記述する際, 彼をギリシア人とみなしていたのか, それとも異民族とみなしていたのか.

ヘロドトスによれば, タレスはあくまでも「ミレトスの人」であった. タレスは異民族リュディアの王クロイソスに仕えながら (Hdt. 1. 75) , ミレトス人としてイオニア人を支援し指導する立場にあった (Hdt. 1. 74, 1. 170) . 更にヘロドトスはタレスの出自に関して, 「タレスの祖先はフェニキア人であった (τὸ ἀνέκαθεν γένος ἐόντος Φοίνικος)」 (Hdt. 1. 170) と補足説明を加える. ヘロドトスはおそらく大意なく, タレスの祖先がフェニキア人に遡ることを指摘したと思われるが, しかしこの記述こそ, ヘロドトスのみならずタレスその人に関する後代の評価に甚大なる影響を及ぼす端緒となった.

例えばプルタルコスは『ヘロドトスの悪意について』の中で, 「七賢人の一人であるタレスの出自をフェニキア人の系統とみなし, 異民族として描いている (Καὶ μὴν ἑπτα σοφῶν, τὸν μὲν Θάλητα Φοίνικα τῷ γένει τὸ ἀνέκαθεν ἀποφαίνεται βάρβαρον)」, とヘロドトス批判を展開する (*De malig.* 15) . ギリシア中心史観を称揚するプルタルコスにとって, ギリシア世界の知的卓越性を象徴する七賢人の一人タレスは, あくまでもギリシア人の血統に帰属すべき存在であり, フェニキア人由来の異民族タレス像を示唆するヘロドトスの記述は, 心情的に容認し難いものであったと推察される. またヘロドトスが描出する勇者ヘラクレスの系図に関しても, プルタルコスは批判の矛先を向ける. ヘロドトスは「ヘラクレスの両親の血統は, 共にエジプトに遡る」と述べ (Hdt. 2. 43) , 「ギリシア人はヘラクレスをエジプトから継承した」と語るが (Hdt. 2. 43) , このような「エジプト起源のヘラクレス像」にプルタルコスは激怒し, 「ヘラクレスをギリシアの地から追放し, 異民族の一員にしよう」と企てている」とヘロドトスを糾弾するのであった (*De malig.* 14) .

上記概観したプルタルコスの反応からも伺えるように, ギリシア文化の異民族起源説を

⁹⁹ この問題に関する論考として, 例えば Pelling (1989) 199-232, Hershbell (1986) 172-185, Swain (1997) 165-187 等々参照.

¹⁰⁰ 松平千秋 (1972) 下巻「解説」387.

実質的に論証するヘロドトス『歴史』は、ギリシア中心史観信奉者にとって耐え難いものであったと思われる。ヘロドトスによれば、エジプト人、フェニキア人、バビュロニア人は、学問文化をギリシア人に教授した由緒ある優れた民族であったが、一方フィロヘレニストたちにとって、彼らは忌むべきバルバロイ（異民族）以外の何者でもなかった。それゆえ、異民族フェニキア人の血筋をひくタレスを巡る評価もまた、後代の学説誌家の間で微妙に揺れ動く。

例えば「哲学の異民族起源説」を批判するディオゲネス・ラエルティオスは、哲学の起源に関して以下のように叙述する。

「哲学については、その起源は二つあった。一つは、アナクシマン드로スから始まるものであり、もう一つは、ピュタゴラスから始まるものである。前者はタレスから聞き学び、ピュタゴラスはペレキュデスが指導した。」

‘Φιλοσοφίας δὲ δύο γεγόνασιν ἀρχαί, ἢ τε ἀπο Ἀναξίμανδρου καὶ ἢ ἀπο Πυθαγόρου: τοῦ μὲν Θαλοῦ διακηκοότος, Πυθαγόρου δὲ Φερεκύδης καθηγήσατο.’ (D. L. 1. 13)

上記箇所から伺えるように、ディオゲネスはイオニア学派の起点をアナクシマン드로スに求め、意図的にタレスをアナクシマン드로スの背後に控えさせたことは注目に値する¹⁰¹。タレスとアナクシマン드로スの関係は、必ずしも緊密な師弟関係の絆で結ばれたものとは言い難く、「タレスから聞き学んだ者 (τοῦ μὲν Θαλοῦ διακηκοότος)」という上記引用箇所の表現から読みとれるように¹⁰²、両者の間の緩やかな距離感をディオゲネスは示唆する。タレスを「哲学の創始者」の位置に据えたのはアリストテレスであったが、ディオゲネスはアナクシマン드로スをイオニア哲学の系譜の正統的始祖に召喚し、その結果タレスを「哲学の創始者」の位置から実質的に追放したともいえよう。

ディオゲネスが描出するタレス像は「フェニキア人の名門」に属する賢人でありこそすれ生粋のミレトス人ではなく¹⁰³、ギリシア人起源の哲学史を展開するディオゲネスは、異

¹⁰¹ デイオゲネス・ラエルティオスは、タレスに続いてソロンを筆頭に据える七賢人の常連を含む「賢人(σοφός)」を10名紹介した後(D. L. 1. 45-122)、ようやく「イオニア哲学(Ἰωνική φιλοσοφία)」の範疇に属する「哲学者(φιλόσοφος)」の系譜を解説し始める。その正式な起点は、アナクシマンδροスであった(D. L. 2. 1)。タレスはあくまでも、イオニア哲学の先駆者にすぎず、その系譜の正統的始祖ではなかった。上記本文で引用したD. L. 1. 13以外にも、イオニア哲学の系譜が始まる(D. L. 1. 122)に‘καὶ πρῶτον γε ἀρκτέον ἀπὸ τῆς Ἰωνικῆς φιλοσοφίας, ἧς καθηγήσατο Θαλῆς, οὗ διήκουσεν Ἀναξίμανδρος’という表現が登場するが、定訳ともいえるHicks(1925 Loeb)は‘I must now start with the philosophy of Ionia. Its founder was Thales, and Anaximander was his pupil’訳出し、安易にタレスをイオニア哲学の始祖(founder)に、またアナクシマンδροスをその弟子(his pupil)と見做すが、これは‘καθηγήσατο’(先導した)および‘διήκουσεν’(聞き学んだ)という語彙のニュアンスを汲み取るとは言い難く、誤訳といえよう。加来訳(1984 岩波文庫)もまたHicksと同様に「その哲学の創始者はタレスであり、アナクシマンδροスは彼から教えを受けた」と訳出しており、タレスを「創始者」とみなす点で誤訳である。

¹⁰² D. L. 1. 122においても同様に‘οὗ διήκουσεν Ἀναξίμανδρος’という表現が登場する。

¹⁰³ タレスの出自を巡るD. L. 1. 22の記述は、あくまでも彼の一家がフェニキア人の血統に帰

民族出自の猜疑が付随するタレスを、哲学の正統的始祖に据えることはなかった。その意味においてディオゲネスは、アリストテレス *Meta. A* が描出する「哲学の始祖としてのタレス像」を踏襲せず、むしろヘロドトスが指摘する「フェニキア人出自のタレス像」を受容したといえよう。一方、ディオゲネスがイオニア学派の始祖に据えたアナクシマンドロスは、生粋のミレトス人として紹介され¹⁰⁴、異民族出自を示唆する言及は一切ない。

このように、ディオゲネス・ラエルティオスに代表されるフィロヘレニストの立場を標榜する学説誌家は、ギリシア的文化の本質規定に関わるフィロソフィアの始祖に異民族の血筋が混じることのないよう、細心の注意を払ったといえよう。また実際、万物の根源を水とみなすタレスの宇宙論は、近年の文献学的精査を通して、明らかにフェニキア人の文化圏に由来することが実証されている¹⁰⁵。その意味においても、タレスを「哲学の始祖」に据えるペリパトス学派の歴史観は、哲学の異民族起源説を実質的に容認するものであった。ペリパトス学派の哲学史編纂に深く関与したテオフラストスは、後代のディオゲネスとは異なり、フェニキア出自のタレスと生粋のミレトス人アナクシマンドロスの直接的な師弟関係を強調する。後代の学説誌家の証言の中にも、テオフラストスに由来する語彙を用いてタレスとアナクシマンドロスの直接的接点を明示する事例が散見される¹⁰⁶。

4. ペリパトス学派が描出する新・文化勢力地図

アリストテレス *Meta. A* が描出する古代ギリシアの哲学史の中で、タレスが「哲学の始祖」に据えられたのは、ヘロドトスと同様にペリパトス学派もまた、ギリシア文化の起源を「ギリシアの内部」に求めるのではなく、空間的には東方の異民族の地へ、そして時間的には「遙か昔に神々のことを語った人々」へと、その文化史的領土を拡大したこと由来すると思われる。但し、文化史的系譜を巡る拡大路線の発端は、ヘロドトスの場合には前5世紀前半のペルシア戦争に由来するギリシア中心史観への批判であり、またペリパトス学派の場合には、系図作成を重用するマケドニア的志向性に加えて、アレクサンドロス大王の東方遠征に絡む当時の政治的文化的力学の諸断面を反映すると推察される。即ち実質的には、前者（ヘロドトス）はギリシア文化の異民族起源というテーゼに基づくイオニア的ヒストリエーを展開し、また後者（ペリパトス学派）はマケドニアの政治的文化的支

属することを強調すると共に、「ミレトス人」というタレスの市民権取得の経緯についても、「フェニキアを追放されたネイレオスと共にミレトスにやって来たときに得た」と説明する。但し「多くの人々によれば、タレスは生粋のミレトス人で、輝かしい家柄の出身者であるという」という一般通念も紹介されるが、ディオゲネス・ラエルティオスはこの見解に賛同していない。

¹⁰⁴ D. L. 2. 1.

¹⁰⁵ West (1994) 305ff.

¹⁰⁶ 例えば *Simpl. in Phys.* 24. 13 ‘διάδοχος καὶ μαθητής’; *Hippol. Ref.* 1. 6 ‘ἀκροατής’; *Ps. Plut. Strom.* 2 ‘ἐταίρος’ 等々。これらの語彙がテオフラストスに由来することに関しては、Kahn (1960) 28-29.

配の正統性を保証する系図作成の要ともいえる「始祖 (ἀρχηγός)」を、アジア東方世界に求めたといえよう。

前 5 世紀から前 4 世紀前半のアテナイで喧伝されたギリシア中心史観において、学問文化の起源はスパルタあるいはアテネのいずれかに限定される傾向にあったが、上記概観したように、前 4 世紀後半アテナイのリュケイオンを拠点に据えるペリパトス学派はアジアへ東方世界へと目を転じたのである。このような当時の動向を反映する古代の証言として、イソクラテス最晩年の作品『パンアテナイア祭演説』に現れる以下の一節は注目に値する。

「ラケダイモン (スパルタ) 人はこれ (諸学問) に無縁で、アジアの異民族よりも遅れをとっている。後者が多くの発見を学び、また教えたことは明らかな事実であるが、前者は人類共通の教育や哲学から取り残され、読み書きすら学習しない。」
(Isocrat. *Panath.* 208)

この演説は、イソクラテス 94 歳の前 342 年から丸 3 年を費やして前 339 年に完成したと推定されるが、イソクラテスが描出する文化勢力地図は、前 5 世紀から前 4 世紀前半のアテナイ知識人たちを虜にしたラコノマニア (スパルタ愛好主義) の風潮を、全否定するに等しい見取り図を提案するものであった。既に本稿前半部で概観したように、イソクラテス『パンアテナイア祭演説』より遡ること 100 年前のアテナイ知識人たちの思潮を活写するプラトン『プロタゴラス』の中で、スパルタは哲学発祥の地として称えられ、またギリシア世界共通の知的規範を象徴する七賢人もまた「スパルタ人の教養の崇拜者であり、熱愛者であり、かつその弟子であった」(*Prot.* 343a5-7) と一括されたことは記憶に新しい。そのスパルタが今や「人類共通の教育や哲学から取り残され、読み書きすら学習しない」と揶揄され (Isocrat. *Panath.* 208)、一方アジアの異民族の文化的卓越性が声高に称賛される事態は、前 4 世紀後半のアテナイを取り巻く政治力学を如実に反映するといえよう¹⁰⁷。アリストテレスがアテナイにリュケイオンを創設したのは、まさにこのような時期であり、*Meta. A* に現れるペリパトス学派の哲学史も、当時の政治力学の地殻変動と無縁ではない。その震源ともいえるアレクサンドロス大王の東方遠征が、ペリパトス学派の拠点リュケイオンと如何なる接点を切り結ぶのか、その断面を示唆する古代の証言を以下手繰り寄せよう。

本稿では特に、アリストテレス『形而上学』と東方遠征中のアレクサンドロス大王を繋ぐ具体的接点を示唆するプルタルコス証言に注目したい。

「アレクサンドロス大王は、これら (アリストテレスの秘密の教え) の教えに関する数冊の書物がアリストテレスによって刊行されたと聞いて、アリストテレスに哲学に関する率直な手紙を書いた。その写しをここに示す。『アレクサンドロスよりアリストテレス

¹⁰⁷ イソクラテスは、親マケドニアの立場であった。イソクラテスの政治姿勢に関する最近の論考として、例えば Too (2006) 106-124 等参照。

へ。「耳で聞く（秘密の門外不出の）」講義をあなたが刊行されたのは正しくないと思う。あなたが私に教授した講義が全ての人に共有されるとすれば、私は他の人々とのような差異を持つことになるのか。私は権力を用いずに、最高の知識によって、他の人よりも優れた人物になりたいと願っている。ご機嫌よう。』するとアリストテレスは、このようなアレクサンドロスの名誉心を慰めて、問題になった講義が刊行されていると共に刊行されていないのだ、と弁明した。即ちアリストテレスによれば、『形而上学（*ἡ μετὰ τὰ φυσικὰ πραγματεία*）』の書物は¹⁰⁸、講義にも学習にも全く使用されないもので、当初より、学習の進んだ上級者向けの覚え書きとしてしたためたものである、という。」（Plutarch *Alex.* 7）

この逸話が示唆するように、アレクサンドロス大王は東方遠征中も折りに触れてはアリストテレスと手紙の遣り取りを重ね、少年時代に師弟関係を結んだアリストテレスの学問動向および書物の刊行に関心を寄せ続けたことが伺える。上記プルタルコス証言は、アジア遠征中のアレクサンドロス大王が興味を示したアリストテレスの書名にも言及する。現存する全ての写本表記によれば、それは『形而上学（*ἡ μετὰ τὰ φυσικὰ πραγματεία*）』であった。アレクサンドロス大王のアジア遠征は、前 336 年から前 332 年に渡り、それはまたリュケイオンを中心とするペリパトス学派の組織的活動が始動した時期と一致する。アリストテレス『形而上学』各巻の成立年代に関しては別途議論が必要だが、ミレトスのタレスを哲学の始祖に据える哲学史を収める『形而上学』A 巻の成立時期を、アリストテレスのリュケイオン創設初期に求めることは十分可能と思われる¹⁰⁹。アジア遠征中のアレクサンドロス大王が所望した『形而上学（*ἡ μετὰ τὰ φυσικὰ πραγματεία*）』の中に、当然『形而上学』A 巻が含まれていた可能性は高い。

従来様々な解釈が提案されているアレクサンドロス大王の文化政策ではあるが¹¹⁰、いずれにせよ東方世界のギリシア化（the Hellenization of the Orient）を完成するためには、出自において非ギリシア人でありながら文化的にはギリシア人を象徴する「哲学の創始者（*ὁ ἀρχηγὸς φιλοσοφίας*）」が必要であった、と本稿は考える。アリストテレス *Meta. A* の中でタレスが「哲学の始祖」に据えられたのは、まさにこのようなヘレニズム文化の始祖の条件に叶う両義性をタレスが体現するからに他ならない、と本稿は分析する。即ちタレスは、既にヘロドトスが証言するように「フェニキア人出身」の異民族の血統に属しながらも、また同時に古代の諸証言が描出するように、タレスの功績の数々は、「理性を行使する批判と討論」への参画のみならず「自然法則を合理的に見いだす」という観点にお

¹⁰⁸ 16 世紀のドイツの人文主義者 W.H. Xylander (1532-1576) は、写本全ての表記を斥け、「自然学（*ἡ περὶ τὰ φυσικὰ πραγματεία*）」と読むことを提案している。

¹⁰⁹ Jaeger(1963)68 は、*Meta. A* の第 1 章と第 2 章と *Protrept.* の関連性を指摘する。*Protrept.* は *Eudem.* と並んでアリストテレス初期の作品であり、*Protrept.* の続編ともいえる *Meta. A* 第 1 章と第 2 章もまた比較的初期の作品といえよう。続く *Meta. A* 第 3 章以下に登場する哲学史の成立時期を、それゆえリュケイオン創設初期に求めることは可能であろう。

¹¹⁰ この問題に関する最近の論考として、例えば Holt(2006)等参照。

いても¹¹¹、ギリシア的知識人の理想的典型に合致するものであったといえる。出自においては非ギリシア人、そして文化的振る舞いにおいてはギリシア人というタレスの両義性こそ、アレクサンドロス大王の東方遠征によって開拓された新しい文化地図を象徴する「東方世界のギリシア化」を具現する人物像の祖型として、タレスはフィロソフィアの系譜の起源に据えられた、と本稿は解釈する。

また *Meta. A* が描出する哲学史は、ヘレニズム期マケドニアを取り込んだギリシア的文化的地図の誕生を意味するともいえよう。かつて学問諸文化を異民族から継承することを通してギリシア人が誕生したように、マケドニア縁のペリパトス学派は、東方世界を含む「父祖伝来の見解」の継承を通して、ギリシア世界の文化的紐帯の一員になったのである。この鳥瞰図の下では、ギリシア・アテナイ中心史観は実質的に相対化され、ソクラテスもプラトンも、そしてピュタゴラス学派も、古来の異民族に遡る「神々のことを語った人々」をも含合する哲学者の一大系譜の中の一つの通過点にしかすぎなかった¹¹²。それら全ての先人達の知的遺産を継承する正統的系譜の嫡子として、ペリパトス学派は自らを位置づけたのである。既に指摘したように、アテナイのリュケイオンを拠点に活動するマケドニア縁のペリパトス学派の大半は、アテナイ市民権を持たないギリシア人であった¹¹³。反マケドニアの論調渦巻く当時のアテナイにおいて、特異な集団を形成する彼らの活動は必ずしも歓迎されるものではなかったが、*Meta. A* が描出する哲学史は、彼らの活動の正統性を証明する一種の証書として機能したと解釈することも可能だろう。

以上描出したように、ペリパトス学派の哲学史編纂には政治的動機が付随するが、また同時に哲学史はそれ自体、個別的の局面でレトリカルな効果を発揮することも、先人達への言及を重用するペリパトス学派の議論の特徴を理解する上で、看過されるべきではないだろう。アリストテレス『弁論術』が分析するように、著名な先人たちの諸業績への言及は、議論の「証人」として機能し¹¹⁴、また『トピカ』が教示するように、命題を作成する際には、「評判のよい人々の見解」一覧を名入りで作成することが推奨されている¹¹⁵。なぜならアリストテレスによれば、「評判のよい先人たちの見解であれば、一般人は承認するからである」¹¹⁶。

¹¹¹ 「自然の発見」と「理性的な批判と議論の実践」という観点でタレスおよびミレトス学派の独自性を描出する視点として、G. E. R. Lloyd (1970) 8ff.

¹¹² この種の学問史観が看取される箇所として、例えば *Meta. A*1074b10-14.

¹¹³ 本稿脚注 79 参照。Lynch(1972)92-93, Jaeger(1948)316. 非ギリシア人に対するペリパトス学派の閉鎖性に関しては、例えば Martin and Lynch(1994)640 参照。

¹¹⁴ *Rhet.* 1. 1375b26ff. 「証人には二種類ある。一つは昔の人々で、他は最近の人々である。…昔の人々というのは、詩人たちや顕著な判断を示した知名な人々のことである。」

¹¹⁵ *Top.* 105b15ff.

¹¹⁶ *Top.* 105b19. また、命題の正当性を、その提唱者の知名度に求めるペリパトス学派の流儀は、「数学的知識の正当性は権威や学派に由来するのではなく、あくまでも公正な演繹的論証によってのみ論証されることを、命題の無名性を通じて主張していた」エウクレイデスの『原論』から看取される幾何学的方法論と極めて対照的である。この問題について、和泉(2007)284以下参照。

このようなペリパトス学派の議論の流儀は、系譜論的視座を効果的に演説に組み込んだ当時の弁論家の手法と呼応するが、更に加えて、イソクラテスらの演説から看取されるように、系譜論の提示を通して、その系譜に連なる継承者の評価を高める意図も介在したといえるだろう¹¹⁷。

以上概観したように、*Meta. A* が描出する古代ギリシアの哲学史は、哲学者および哲学それ自体の系譜の正統性に関する権威ある枠組みとして君臨し続けたとはいえ、その内実は極めて特異であった。その特異性を構成する諸要素として本稿が指摘した項目は、辺境マケドニア特有の系譜論的志向性、アリストテレス『生まれの良さ』から看取される「始祖 (ἀρχηγός)」尊重の通念、哲学の起源を巡るギリシア各都市のせめぎ合い、学問文化の異民族起源を巡る拮抗、そしてアレクサンドロス大王の東方遠征と連動するペリパトス学派による新しい文化地図の作成等々であり、それらは前 5 世紀から前 4 世紀にかけてのギリシア世界を取り巻く政治力学の揺らぎを反映するといえよう。*Meta. A* に現れる哲学史は、これらの思惑が複雑に絡み合い堆積した地層模様の一断面でもあり、その特異な大地から生まれ出たのが哲学者という種族であったともいえよう。

アリストテレス『形而上学』A 巻に織り込まれた哲学史には、少なくとも以上のような特殊性および諸問題が付随していることを本稿は指摘し、哲学という学問分野の実質的内実を見極めるための一つの端緒としたい。

補遺：アレクサンドロス・ミレトス・アリストテレスの接点について

ペリパトス学派による組織的調査を反映する代表的論考の一つに、アリストテレス『政治学』がある¹¹⁸。興味深いことに、『政治学』に記載された市民権を巡る諸規定を反映する碑文資料が現存する¹¹⁹。その内容はミレトスの外交政策に関するもので、碑文成立時期は前 323 年、即ちアジア遠征中のアレクサンドロス大王がミレトスをペルシアから解放した後の状況を反映するという¹²⁰。アリストテレス『政治学』の主張が、アレクサンドロス大王によるミレトス解放を契機に、ミレトスの政策に実際反映されたという事態は（むしろ両者の影響関係に関して、逆にミレトスの政策がアリストテレス『政治学』の議論に反映されたことも十分想定されるが）、ペリパトス学派の学問活動とアレクサンドロス大王の東方遠征相互の緊密な呼応関係の一端を示唆すると解釈されよう。更に興味深いことに、

¹¹⁷ Isocrates *Panath.* 26, *Ad. Nic.* 35, *Antid.* 306-8, *De Pace.* 37-8 等々。

¹¹⁸ *Polit.* が準拠する資料の大半はペリパトス学派による組織的収集活動に基づくであろうことは、その実質的内容および *Rhet.* 1360a33ff. の記述等から十分推察される。

¹¹⁹ Graham (1964) 99-101. *Polit.* 1275a34, 1277b34, 1278a36.

¹²⁰ Graham (1964) 98-117. また *Polit.* 1311b1-3 で言及されるピリッポス 2 世暗殺事件を考慮すると、*Polit.* の成立時期は少なくとも前 336 年以降であり、また上記言及したミレトスの碑文資料との影響関係を考慮すると、アレクサンドロス大王によるミレトス解放の前（ミレトス碑文が *Polit.* の記述を反映する場合）あるいは後（*Polit.* がミレトス碑文を反映する場合）の可能性が浮かび上がるが、更なる検証は折をあらためなければならない。

アリストテレス『政治学』には「政治家でない人々のうちで、初めて最善の国政について何かを語ろうと試みた人物（*πρῶτος τῶν μὴ πολιτευομένων ἐνεχέρησέ τι περὶ πολιτείας εἰπεῖν τῆς ἀρίστης*）」（*Ar. Polit.* 2. 1267b29-30）として「ミレトスの人ヒッポダモス（*Ἴππόδαμος Μιλήσιος*）」が登場し、また財産に関する規定を「初めて導入した（*εἰσήνεγκε πρῶτος*）」人物として「カルケドンのパレアス（*Φαλέας Χαλκηδόνιος*）」（*Ar. Polit.* 2. 1265b39）の名が言及される¹²¹。両者ともにギリシア本土の出身ではなく、エーゲ海東岸のイオニアおよびボスポラス海峡東岸のビチュニア出身であることもまた、政治に関する特筆すべき事績の起源をアリストテレスが東方世界に求めたことの傍証となるだろう。実際アリストテレス『政治学』の中にタレスも登場するが、彼を巡る系譜は以下のように提示される。

「ある人々によれば、以下のような結合を試みている…タレスにはリュクルゴスとザレウコスが弟子となり、ザレウコスにはカロンダスが弟子となったという。しかし彼らは、余りに時代を無視して語っている。」

‘πειρῶνται δέ τινες καὶ συνάγειν ὡς… Θάλητος δ’ ἀκροατὴν Λυκοῦργον καὶ Ζάλευκον, Ζαλεύκου δ’ Χαρώνδαν. ἀλλὰ ταῦτα λέγουσιν ἀσκεπτότερον τῶν χρόνων λέγοντες.’ (*Polit.* 2. 1274a25-31)

リュクルゴスはスパルタの法律制度を創設した伝説的人物であり¹²²、ザレウコスは前 7 世紀中葉に活躍したイタリア・ロクリスの法律制定者¹²³、またカロンダスは前 6 世紀シケリアの立法家である¹²⁴。上記アリストテレスの証言から、スパルタ、ロクリス、シケリアをそれぞれ代表する最初期の優れた立法家の始祖として ミレトスの人タレスを祭り上げる「ある人々（*τινές*）」（*Polit.* 2. 1274a25）の存在が浮かび上がる。『政治学』の記述は、ペリパトス学派が組織的に収集し調査した文献資料あるいは個別的伝聞に基づくが¹²⁵、ミレトスの人タレスを立法家の系譜の始祖に据える「ある人々（*τινές*）」とは一体誰なのか、その具体像を模索するために必要な手がかりは皆無に近い。「ある人々（*τινές*）」とはペリパトス学派内部に元来帰属するのか、それとも、アレクサンドロス大王が前 323 年にペルシアから解放したミレトスに縁ある系譜論者の集団なのか、憶測は憶測を呼ぶばかりである。

しかしいずれにせよ、アリストテレス『政治学』に痕跡を残す上記の「ある人々（*τινές*）」が、*Meta. A* に「哲学の始祖」として突如現れるタレス像の由来にも関与したであろうことは容易に推察されるが、論文の域を逸脱するこれ以上の詮索は、補遺においても控えなければならない。

¹²¹ *TLG* に基づく用語検索によれば、国政に関する個別的事績に関する創始者として言及されるのは、*Polit.* の中で、この 2 名のみである。

¹²² *Hdt.* I. 65-6, *Plut. Lyc.* 等参照。

¹²³ *Jacoby FGtH* 566, F130.

¹²⁴ カロンダスに関する主要典拠は *Polit.* 1274a-b である。

¹²⁵ *Lloyd* (1969) 246ff., *Rhet.* 1360a32-1361b1.

【文献】

- Barkowski, O. 1923. "Sieben Weise," in Pauly-Wissowa *RE* 2 A/2, 2242-2264.
- Barnes, J. and Griffin, M. ed., 1997. *Philosophia Togata. 2, Plato and Aristotle at Rome*. Oxford.
- Bodnár, M., and Fortenbaugh, W. ed. 2002. *Eudemus of Rhodes*. New Brunswick.
- Bowen, A. 2002. "Eudemus' History of Early Greek Astronomy: Two Hypotheses." in Bodnár, M., and Fortenbaugh, W. ed. 2002. 307-322.
- Cartledge, P. 2001. *Spartan Reflections*. London.
- Couprie, D.L. 2004. "How Thales Was Able to Predict a Solar Eclipse without the Help of Alleged Mesopotamian Wisdom." *Early Science and Medicine* 9: 321-337.
- Dicks, D. R. 1959. "Thales." *Classical Quarterly* 9: 294-309.
- 1970. *Early Greek Astronomy to Aristotle*. London.
- Dod, B.G. 1982. "Aristoteles latinus," in Kretzmann, Kenny and Pinborg, ed., 1982, 45-79.
- Düring, I. 1957. *Aristotle in the Ancient Biographical Tradition*. Göteborg.
- Fatoohi, L. J. 1997. "Thales' Prediction of a Solar Eclipse." *Journal of History of Astronomy* 28 : 279-282.
- Graham, A. J. 1964. *Colony and Mother City in Ancient Greece*. Manchester.
- Griffin, M. and Barnes, J. ed., 1989. *Philosophia Togata: Essays on Philosophy and Roman Society*. Oxford.
- Guthrie, W. K. C. 1981. *A History of Greek Philosophy, Vol. VI: Aristotle, An Encounter*, Cambridge.
- Hall, J. M. 1997. *Ethnic Identity in Greek Antiquity*. Cambridge.
- Hartner, W. 1969. "Eclipse Period and Thales' Prediction of a Solar Eclipse." *Centaurus* 14: 60-71.
- Hershbell, J. P. 1986. "Plutarch and the Milesian philosophers." *Hermes* 115: 172-185.
- Holt, F. L. 2005. *Into the Land of Bones : Alexander the Great in Afghanistan*. Berkeley.
- Jaeger, W. 1948. *Aristotle: Fundamentals of the History of His Development*, trans. R. Robinson. 2nd ed. (1st ed. 1934). Oxford.
- James, P. ed., 2006. *The Classical Traditions of Greece and Rome*. Princeton.
- Jong, A. de. 1997. *Traditions of the Magi : Zoroastrianism in Greek and Latin literature*. Leiden.
- Jüthner, J. 1923. *Hellen und Barbaren*. Leipzig.
- Kahn, C. 1960. *Anaximander and the Origins of Greek Cosmology*. New York.
- Kirk, G. S., Raven, J. E. and Schofield, M. 1983. *The Presocratic Philosophers*. Cambridge.
- Kretzmann, N., Kenny, A. and Pinborg, J. 1982. *The Cambridge History of Later Medieval Philosophy : From the Rediscovery of Aristotle to the Disintegration of Scholasticism. 1100-1600*, Cambridge.
- Lawton, C. L. 2003. "Athenian anti-Macedonian Sentiment and Democratic Ideology in Attic Document Reliefs in the Second Half of the Fourth Century B.C.," in Palagia, O. and Tracy, S.V. ed. 2003. *The Macedonians in Athens 322-229 B.C. : Proceedings of an International Conference Held at the University of Athens, May 24-26, 2001*. Oakville. 117-127.
- Lewis, D.M., Boardman, J., Hornblower, S., and Ostwald, M. ed., 1994. *The Cambridge Ancient History* 2nd. ed. VI *The Fourth Century B.C.* Cambridge.
- Lloyd, G. E. R. 1968. *Aristotle. The Growth and Structure of his Thought*. Cambridge.
- 1970. *Early Greek science. Thales to Aristotle*. London.
- Lohr, C.H. 1982. "The medieval interpretation of Aristotle," in Kretzmann, Kenny and Pinborg, ed., 1982, 45-79.
- Lynch, J. P. 1972. *Aristotle's School. A study of a Greek Educational Institution*. Berkeley.
- Malkin, I. ed. 2001. *Ancient Perceptions of Greek Ethnicity*. Harvard.
- Mansfeld, J. 1986. "Diogenes Laertius on Stoic Philosophy." *Elenchos* 7: 297-382.
- Mejer, J. 1978. *Diogenes Laertius and his Hellenistic Background*. Wiesbaden.
- 2002. "Eudemus and the History of Science," in Bodnár, M., and Fortenbaugh, W. ed. 2002. *Eudemus of Rhodes*. 243-261.
- O'Grady, P.F. 2002. *Thales of Miletus : the Beginnings of Western Science and Philosophy*.

- Aldershot.
- Ostwald, W. and Lynch, J. 1994. "The Growth of Schools and the Advance of Knowledge," in Lewis, D.M., Boardman, J., Hornblower, S., and Ostwald, M. ed., 1994. 592-633.
- Palagia, O. and Tracy, S.V. ed. 2003. *The Macedonians in Athens 322-229 B.C. : proceedings of an international conference held at the University of Athens, May 24-26, 2001*. Oakville.
- Panchenko, D. 1994. "Thales' s Prediction of a Solar Eclipse." *Journal of History of Astronomy* 25: 275-288.
- Pelling, C. 1989. "Plutarch : Roman Heroes and Greek Culture," in Griffin, M. and Barnes, J. ed., *Philosophia Togata: Essays on Philosophy and Roman Society*. Oxford. 199-232.
- Rosivach, V. J. 1987. "Autochthony and the Athenians." *Classical Quarterly* 38 : 294-306
- Snell, B. 1924. *Die Ausdrücke für den Begriff des Wissens in der Vorplatonischen Philosophie*. Berlin.
- Swain, C. R. 1997. "Plutarch, Plato, Athens, and Rome. Plato and Aristotle at Rome, " in Barnes, J. and Griffin, M. ed., *Philosophia Togata. 2, Plato and Aristotle at Rome*. Oxford. 165-187.
- Tarán, L. 1975. *Academica. Plato, Philip of Opus, and the Pseudo-Platonic Epinomis*. Philadelphia.
- Thomas, R. 2001. "Ethnicity, Genealogy, and Hellenism in Herodotus," in Malkin ed. *Ancient Perception of Greek Ethnicity*, Harvard. 213-233.
- Too, Y. L. 2006. "Rehistoricizing Classicism : Isocrates and the politics of metaphor in fourth-century Athens," in James, P. ed., *The Classical Traditions of Greece and Rome*. Princeton. 106-124.
- West, M. L. 1994. "Ab Ovo : Orpheus, Sanchuniathon, and the Origins of the Ionian World Model." *Classical Quarterly* 44 : 289-307.
- 1997. *The East Face of Helicon: West Asiatic Elements in Greek Poetry and Myth*. Oxford.
- Wilamowitz-Moellendorff, U. von. 1890. "Zu Plutarchs Gastmahl der Sieben Weisen." *Hermes* 25: 196-227.
- Zhmud, L. 2002. "Eudemos' History of Mathematics." In Bodnár. M., and Fortenbaugh. W. ed. 2002. 263-306.
- 2006. *The Origin of the History of Science in Classical Antiquity* / transl. by Alexander Chernoglazov. Berlin ; New York.
- 和泉ちえ 2009. 「哲学とジェンダー」『岩波講座哲学 15 変貌する哲学』岩波書店. 47-78.
- 2007. 「ギリシアの数学」『哲学の歴史 2 帝国と賢者』中央公論新社. 266-297.

III. 新ピュタゴラス主義の起源を巡って¹²⁶

1. 問題の所在

フィロソフィアの系譜の始祖にピュタゴラスを据え、自らをその思想の継承者として位置付ける新ピュタゴラス主義の思潮は、例えば 1 世紀後半のゲラサで活躍したニコマコス『数論入門』をはじめ 3 世紀のイャンブリコス『ピュタゴラス伝』等からも顕著に看取されるが¹²⁷、この思潮が何故に生成したのか、新ピュタゴラス主義の起源を巡る諸問題は未だ十分に検討され尽くしたとは言い難い。

通常哲学史において、新ピュタゴラス主義の萌芽は、古代の諸証言に基づき前 4 世紀後半のアカデメイアの学頭スペウシポスやクセノクラテスに求められる傾向にある。即ち彼らはアカデメイアの学頭に選出されたという意味においてプラトンの後継者ではあったが、思想的にはプラトンよりもむしろピュタゴラス学派の衣鉢を継ぐことが、特にアリストテレスの証言等を通して示唆されるからである¹²⁸。また彼らと同時期にアカデメイアで学んでいたと推測されるポントスのヘラクレイデスは¹²⁹、以下のように証言する。

「フィロソフィアという言葉を最初に用い、また自らをフィロソフォスと呼んだ人物はピュタゴラスであった（*Φιλοσοφίαν δὲ πρῶτος ὠνόμασε Πυθαγόρας καὶ ἑαυτὸν φιλόσοφον*）。」（DL. *Proem.* 12）

しかし上記の証言が伝えるピュタゴラス像は、ピュタゴラス学派に傾倒するヘラクレイデスが捏造したものであり、そこに歴史的信憑性を見出すことは不可能に近いと解釈される傾向にある¹³⁰。ギリシア哲学研究者諸氏多数が共有する上記の解釈路線は、ヘラクレイデスの証言の歴史的信憑性に着目する限り、表層的には極めて妥当であるといえよう。この解釈に従う限り、前 4 世紀後半のアカデメイアに新ピュタゴラス主義的思潮が萌芽したとはいえ、フィロソフィアそれ自体の創始者としてピュタゴラスを位置付けることは、歴史錯誤と判断される。しかしながら、前 4 世紀に既に伝説上の人物と化していたピュタゴラスに関する古代の証言の歴史的信憑性を疑問視する視座は、通念の域を出るものではなく、その意味において上記のヘラクレイデスの証言は、本来の価値を正當に精査されることなく無造作に博物館の陳列棚の隅に放り投げられた化石標本に等しい扱いを受けたとも

¹²⁶ 本稿は *Studia Classica* 2 (2011) 369-377 頁に掲載した拙論に基づく。

¹²⁷ Nicomach. *AE.* 1. 1, *Iamb. VP.* 1. 1.

¹²⁸ Arist. *Meta.* 1072b30ff, *EN.* 1096b5-8.

¹²⁹ ヘラクレイデスの生涯に関しては、DL. 5. 86-93, Wehrli (1953), Gottschalk (1980) 1-12.

¹³⁰ ヘラクレイデスの証言に関する歴史的信憑性に関しては、例えば Jaeger (1928) 99ff, Burkert (1960) 160ff, Riedweg (2005) 90-97, Huffman (2008) 207ff. またアリストテレスが *Meta. A.* で展開する哲学史においても、哲学の始祖としてのピュタゴラス像は登場しない。

いえよう。

むしろ問い直されて然るべき事柄は、ヘラクレイデスの証言の歴史的信憑性それ自体ではなく、何故に、この時期に至ってヘラクレイデスがフィロソフィアの創始者として敢えてピュタゴラスを選んだのか、その動機の在処であると本稿は考える。但し「新ピュタゴラス主義」という概念を用いてヘラクレイデスの動機を安易に説明することは控えなければならない。本稿が着目するのは新ピュタゴラス主義の生成過程であり、何故にフィロソフィアの創始者としてのピュタゴラス像が誕生したのか、その経緯を前4世紀後半アテナイにおける哲学史編纂の動向を考慮に入れつつ丁寧に洗い出し、フィロソフィアの営みに内在する歴史的特殊性の一断面を抉り出したいと思う。本稿は、そのための予備的考察である。

2. 前4世紀後半アテナイにおける哲学史編纂の動向

「哲学の創始者」を措定しフィロソフィアの系譜を描く志向性は、元来プラトン哲学には内在しない。プラトン当時のアカデメイアにおいて、哲学者の系譜は本質的に無用であった¹³¹。

一方アリストテレスは、ミレトスのタレスを「哲学の創始者 (*ὁ ἀρχηγὸς φιλοσοφίας*)」に据え (*Meta.* 983b20-21)、フィロソフィアの営みを系譜論的に辿りながら自らを古代ギリシアの知的伝統の正統なる継承者として喧伝した。『形而上学』A巻が繰り広げる古代ギリシアの哲学史絵巻の特異性の由来に関しては、昨年本誌に掲載した筆者の議論を参照していただきたい¹³²。その論点の中でも特に今回、本稿の考察を進めるに際して重要と思われる事項を、あらためて以下再確認したいと思う。

まず第一に、ペリパトス学派がアテナイに跋扈する以前、哲学的思潮の出自をミレトスのタレスにまで遡り系譜論的に鳥瞰し、その系図を同志間で共有する姿勢を顕示する学派は、皆無に近いといえよう。プラトンの学園アカデメイアにおいても、またエレア学派においても、当時のピュタゴラス学派においても、哲学史が編纂された痕跡は皆無であった。アリストテレス以前の哲学者の連帯は、師への敬愛あるいは理念および探求法の共有に基づく場合が常であり¹³³、特定の哲学史観を学派内で共有するペリパトス学派の振る舞いは、その意味においても極めて特異であったと判断される。

¹³¹ プラトンにおける哲学史の問題に関しては、例えば Bányi (2004) 305-328.

¹³² 和泉 (2010) 95-120.

¹³³ 和泉 (2010) 96n3. ピュタゴラス学派の連帯は「師ピュタゴラスに対する特別の敬愛とピュタゴラス的生き方の遵守」によって維持され (*Pl. Rep.* X 600b2-5)、またプロタゴラスやプロディコスなどのソフィストを取り巻く弟子たちの連帯も「師への敬愛」に由来する (*Pl. Rep.* X 600d3-4)。またプラトン周囲の同志の絆は「馴れ合い的な友情ではなく、自由人らしい教養を共に追求するという、その協同活動を通じて」形成されることを志向した (*Pl. Epist.* VII 334b4-6)。しかしペリパトス学派に関しては、「師アリストテレスへの敬愛」を示唆する古代の証言は皆無である。

第二に、ディオゲネス・ラエルティオスが指摘するように、アリストテレスやソテティオンが提示するペリパトス学派の歴史認識は「哲学の異民族起源説」を主張するものであった¹³⁴。一方、フィロヘレニスト的哲学史観を表明するディオゲネス・ラエルティオスによれば、「哲学はギリシア人に端を発するのであり、哲学という名前そのものも、異民族の言葉で呼ばれることを拒否している（*μὲν ἀφ' Ἑλλήνων ἤρξε φιλοσοφία, ἧς καὶ αὐτὸ τὸ ὄνομα τὴν βάρβαρον ἀπέστραπται προσηγορίαν*）」(D.L. 1. 4) という。ディオゲネスの批判は、アリストテレス *Meta. A* の哲学史もまた、ペリパトス学派に流布する「哲学の異民族起源説」と無関係ではないことを示唆するといえよう。

第三に、ディオゲネスはイオニア学派の起点をアナクシマンドロスに求め、アリストテレスが描出する「哲学の創始者」としてのタレス像を継承することはなかった¹³⁵。即ち哲学の起源をギリシア人に求めるディオゲネスにとって、「フェニキア人の名門」に属する賢人でありこそすれ生粋のギリシア人ではないタレスが¹³⁶、哲学の正統的始祖の位置に鎮座する *Meta. A* 流の哲学史観は忌避されて然るべきものであったと推察される。

第四に、前 5 世紀後半から前 4 世紀前半にかけて「全ギリシア世界の知恵の殿堂」を標榜するアテナイで紡がれた哲学の断片的系譜は、フィロソフィアの営みをギリシア人の文化的本質規定に深く関与するものとして描出し、その起源もまた、アテナイあるいはラケダイモンあるいはクレタなどの複数の候補があるにせよ、いずれもギリシア世界の内側に限定されるものであった¹³⁷。一方、マケドニアとの関係が深いペリパトス学派は、ギリシア文化の起源を「ギリシアの内部」に求めるのではなく、空間的には東方の異民族の地へ、そして時間的には「遙か昔に神々のことを語った人々」へと、その文化史的領土を拡大した。前 4 世紀後半、かつて七賢人が崇拝した教養主義の拠点として名高いスパルタの人々の状況は「人類共通の教育や哲学から取り残され、読み書きすら学習しない」と揶揄されるほどに凋落し (Isocrat. *Panath.* 209) 、一方アジアの異民族の文化的卓越性が声高に称賛される¹³⁸。

そして第五に、東方世界のギリシア化というマケドニアの文化政策の潮流は、出自において非ギリシア人でありながら文化的にはギリシア人を象徴する「哲学の創始者（*ὁ ἀρχηγὸς φιλοσοφίας*）」の存在を必要としたことは想像に難くない。余談ではあるが、元来バルバロイの地としてギリシア世界の枠組から排除され続けてきた辺境マケドニアの精神風土は、オリンピック祭典への出場権および「生まれの良さ」を保証する「始祖」重視の

¹³⁴ デイオゲネス・ラエルティオスは、ペリパトス学派の歴史認識を反映するアリストテレス『マギコス』やソテティオン『哲学者たちの系譜』を批判し、これらの書物は「哲学は異民族の間から起ったと主張する人々（*τὸ τῆς φιλοσοφίας ἔργον ἐνιοί φασιν ἀπο βαρβάρων ἄρξαι*）」(D.L. 1. 1; 1. 6) の産物であるという。

¹³⁵ 和泉 (2010) 110-111.

¹³⁶ D.L. 1. 22, Plut. *De malig.* 15.

¹³⁷ Pl. *Theaet.* 152e3ff, 160d7ff, 179e3ff, *Crat.* 401dff, *Tim.* 21eff, *Ep.* 986e9, 987e1-2.

¹³⁸ Isocrat. *Panath.* 209. イソクラテスのアジア観については、例えば Stephen (1994) 131-155.

系図作成に対して、固有の執着を示すことが古代の諸証言等を通して看取される¹³⁹。アリストテレス *Meta. A* においてタレスが「哲学の始祖」に据えられたのは、このようなマケドニアの系譜論的イデオロギーを背景に、アレクサンドロス大王の権力の一翼を形成するヘレニズム文化の系図に相応しい「始祖」の要件を、フェニキア人出自のギリシア的知識人として活躍するミレトスのタレスが備える故と思われる¹⁴⁰。そしておそらくは、アレクサンドロス大王によるミレトス解放の前後に、「ミレトスのタレスを礼賛する人々」とペリパトス学派の間に何らかの接触があったのではないかと、この憶測も許されるだろう¹⁴¹。

さて、以上再確認したように、前 4 世紀後半ペリパトス学派が編纂した哲学者の系譜は、上記の諸状況に由来する一つの歴史的産物であり、そこに投影されたペリパトス学派の様々な思惑の存在を再認識することは、アリストテレス的哲学史観の本質を見極める上で、無益なことではないだろう。一方プラトン当時のアカデメイアにおいては、哲学史編纂に対する興味関心が元来希薄であり、この特徴はペリパトス学派との対比において、再考に値すると思われる。「大地から生まれた人々」のスローガンが象徴するように、前 5 世紀中葉以降のアテナイ知識人は系譜論的枠組みからの脱却を主張し¹⁴²、プラトンもまた、その脱系譜論の系譜に連なるといえよう。更に加えて「全ギリシアの知恵の殿堂」としての栄光を誇るアテナイの名門貴族出身のプラトンにとっては、その知的系譜の正統性を哲学史編纂作業を通して内外に誇示する必要性も殊更なかったと推察される。

しかしペリパトス学派による哲学史編纂の気運と時を同じくして、プラトン亡き後のアカデメイアの内部に、ピュタゴラスを哲学の創始者に据える新ピュタゴラス主義の潮流が勃興する。この事態は一体何を意味するのか、以下考察を進めたい。

3. フィロソフィアの所有権を巡る攻防 —「哲学の勧め (προτρεπτικός λόγος)」の系譜—

以前議論したことではあるが¹⁴³、元来哲学者 (φιλόσοφος) とは職業身分を明示する言葉ではなく、「名誉や金銭を放棄し純粋に知恵 (σοφία) を希求する者」という生き方の一つの範型を表明する用語であった¹⁴⁴。それゆえ専門的技術の行使を通して客観的に認知され報酬を得る医者や教師、その他各種職人の場合とは異なり、哲学者という呼称が成立する事情は特殊である。

碑文資料を辿る限り、古代ギリシア世界において哲学者という言葉が一般的な呼称とし

¹³⁹ Hdt. 5. 22, Ar. *Eug.* 4, 和泉(2010)103-4.

¹⁴⁰ 和泉(2010)108-116.

¹⁴¹ タレス礼賛一派の痕跡として Ar. *Polit.* 2. 1274a25-31, 和泉(2010) 116-118.

¹⁴² Stob. 4. 29A24, 4. 29C53, Eur. Fr. 345 Nauck.

¹⁴³ 和泉(2008)48-53.

¹⁴⁴ Cic. *TD* 5. 8-9.

て認知され始めたのは前 3 世紀以降であり¹⁴⁵、またアテナイの民会決議による公的顕彰の対象者として哲学者が登場するのは前 2 世紀初頭以降のことであった¹⁴⁶。哲学者の正統的原型ともいえるソクラテスに関して言えば、彼が活躍した前 5 世紀後半のアテナイにおいて哲学者という名称が流布していたことを積極的に示唆する古代の証言はなく¹⁴⁷、また実際プラトン諸対話篇やクセノポン『ソクラテスの思い出』あるいはアリストパネス『雲』等の中でソクラテスに対して自称他称を問わず哲学者 (*φιλόσοφος*) という呼称が付与された箇所もない¹⁴⁸。生前のソクラテスに実際付随した呼称はむしろ一般的な「思索者 (*φροντιστής*)」あるいは「賢者 (*σοφός*)」であったと推察される¹⁴⁹。

またプラトン『国家』から看取されるように、当時のアテナイには「自称哲学者たち」が跋扈しており、彼らの姿をプラトンは、乙女フィロソフィアとの結婚を画策する破廉恥な醜男の一群として戯画化している¹⁵⁰。プラトンは、この種の自称哲学者とは一線を画す真の哲学者の実質的諸要件を彫琢しつつも、「哲学者」あるいは「哲学」という表層的な呼称それ自体に固執することはなかった¹⁵¹。哲学あるいは哲学者という呼称を求める者ほど哲学者としての諸要件を根本的に欠く、という当時の（そして残念ながら今日のアカデミズムにおいても散見される）俗世の現実からプラトンは目を逸らすことはなかった。そしてこのこともまた、哲学者の系譜に対するプラトンの関心の希薄さの、一つの事由を物語ると思われる。

一方、哲学者の系譜を編纂し自らをその正統なる継承者として位置付けるアリストテレスは、また同時に、論理学、数学、自然学、神学、倫理学、政治学、経済学、弁論術、詩学などの個別的の学問諸分野をフィロソフィアの名の下に統合的に体系化し、フィロソフィアそれ自体の身体を、一つの堅固な巨大な実体として構築した。かつてプラトン『国家』の一隅に現れた「貧乏な孤児の乙女」としてのフィロソフィアの姿は¹⁵²、このようにアリストテレスによって、諸学問を従える威風堂々とした女王へと変身したのである。彼女が君臨する王国はアリストテレスのリュケイオンであり、その財政的援助はマケドニアが担い、女王フィロソフィアの名と姿はペリパトス学派の知的権威を誇示する一種の紋章として機能したと解釈される。

この動向と「哲学の勧め」の系譜が少なからず連動するのではないかと本稿は考察する。前 4 世紀後半のアテナイにおいて「哲学の勧め」を積極的に推進した主要人物はアリ

¹⁴⁵ 前 3 世紀のアッティカ碑文 *IG II (2). 791. 30* に、一部欠損状態ではあるが、“*Λύκων φιλόσο(φος)*” という表記が登場する。

¹⁴⁶ D. L. VII. 10-12, Haake (2004) 470-483.

¹⁴⁷ この問題を巡る明解な見取り図として、廣川洋一 (1984) 99-106, 151-165.

¹⁴⁸ ソクラテスに対する当時の呼称を巡る最近の研究として、Edmunds (2006), 414-425.

¹⁴⁹ Aristoph, *Nubes*, 414, Pl. *Apol.* 18b7, 38c3, etc.

¹⁵⁰ Pl. *Rep.* VI. 495e4-8.

¹⁵¹ 「哲学」および「哲学者」の使用例がプラトン後期作品において著しく減少する事態について、例えば廣川 (1984) 151-162.

¹⁵² Pl. *Rep.* VI. 495e7-8.

ストテレスやイソクラテスであり¹⁵³、彼らは思想的にはプラトンとは一線を画しつつ、また政治的には両者共に親マケドニアの立場を表明していた。一方ギリシア的学問文化の精華を所有しその継承権の掌握を切望する辺境マケドニアの王たちは、彼らの知的卓越性の尺度を、ギリシア的学知を象徴する「フィロソフィア」への造詣の深さに求める傾向にあった。実際イソクラテスやアリストテレスは「フィロソフィア」を通してマケドニア王フリッポスやアレクサンドロスと親交を深めており¹⁵⁴、マケドニアが求めるギリシア的諸学問は「フィロソフィア」の名のもとに献上されたといえるだろう。アリストテレスやイソクラテスが扇動する「フィロソフィア！」のシュプレヒコールには、新興勢力マケドニアの意向を勘案した政治的意図が付随すると思われる¹⁵⁵。

さてここで、プラトン『エウテュデモス』に目を向けよう。通常この作品は「哲学の勧め」のプラトン版として解釈される傾向にあるが、その実質的内容は、エウテュデモスやディオニュソドロスに象徴される「哲学を生業とする人々」に対する批判的吟味であり、彼らが唱える「哲学せよ」という言葉それ自体の空虚な実態が鮮明に浮き彫りにされた¹⁵⁶。『エウテュデモス』は他のプラトン諸対話篇と同様に、「生業としての哲学」に携わり「哲学せよ」と声高に主張する者ほど「哲学」からほど遠いという現実を前提に据えており、この現状と終生対峙し続けたプラトンは、次第にフィロソフィアという言葉の使用を控え、最晩年の『法律』そして『エピノミス』に至っては「フィロソフィア」の姿は作品の表舞台から姿を消す¹⁵⁷。その意味においてフィロソフィアの表層的所有を忌避したとも言えるプラトンは、女王フィロソフィアの巨大な肖像を錦の御旗に掲げ「哲学の勧め」を喧伝するアリストテレスの対極に鎮座するといえよう。

4. 「哲学の創始者としてのピュタゴラス像」の誕生

本稿が指摘した上記の諸論点は、前4世紀後半のアテナイで活躍したポントスのヘラクレイデスが一体何故に「哲学の創始者としてのピュタゴラス像」を描出したのか、その理

¹⁵³ アリストテレス『哲学の勧め』、イソクラテス『デモニコスに与う』、『ニコクレスに与う』、『ニコクレス』、『アンティドシス』等。

¹⁵⁴ イソクラテスがマケドニア王フリッポスの「哲学への造詣の深さ」を褒めそやす下りは Isoc. *Philip*. 29. またアレクサンドロス大王とアリストテレスの関係が「哲学」を通して維持されていたことに関しては Plut. *Alex*. 7-8.

¹⁵⁵ 上記注 154 などから伺えるように、ギリシア世界の辺境マケドニアの王たちは、ギリシア的学問文化を端的に象徴する「フィロソフィア」の言葉に特別の関心を示していたことが伺える。イソクラテスやアリストテレスは「フィロソフィア」をマケドニア王に教授することによって親マケドニア派としての政治的立場を固め、対抗勢力渦巻く当時のアテナイにおいて、国政に関する主義主張を展開した。イソクラテス、アリストテレスとマケドニアとの政治的関わりについては、稿を改めて議論したい。

¹⁵⁶ この観点から『エウテュデモス』を読み解く可能性についても、稿を改めて議論したい。

¹⁵⁷ 『エピノミス』は、後代に付された副題「フィロソフォス」以外、本文中に「フィロソフィア」および「フィロソフォス」の言葉は一度も現れない。

由の一端を解明する手掛かりを提供すると思われる。周知の如くヘラクレイデスは、ほぼアリストテレスと同時期にプラトンのアカデメイアで学び、「地球の自転」と「金星と水星の太陽周回運動」を提唱した人物としてカルキディウス『ティマイオス注釈』にその名を残すが¹⁵⁸、また同時にキケロやディオゲネス・ラエルティオスが言及するように、哲学の創始者としてのピュタゴラス像に関する最古の証言を収録する『息の絶えた女(Περὶ τῆς ἄπνου)』の著者でもあった¹⁵⁹。

既に本稿冒頭でも述べたように、現代の古典文献学者は、ヘラクレイデスが描出する「哲学の創始者としてのピュタゴラス像」それ自体の歴史的信憑性を否定する傾向にあるが、むしろ本稿はヘラクレイデスが斯様なピュタゴラス像に言及した動機の在処に目を向け、上記の描出した諸状況を総覧したいと思う。そこに浮かび上がる一つの光景は、哲学の起源を巡るリュケイオンとアカデメイアの相克である。即ちアカデメイアの知的伝統は、自然探求を主軸とする東方世界イオニアの諸成果を継承するとは言い難く、むしろパルメニデスやフィロラオスそしてアルキュタスなどのアテナイ西方のイタリア・シケリア方面の知識人との交流を通して形成されたものであり、それゆえリュケイオンが提唱するフィロソフィアの東方世界イオニア起源というマケドニア好みのアジア偏重哲学史観は、アカデメイアの知的アイデンティティーと相容れるものではなかったと推察される。

また数学的諸学科(マテマタ)を重視するアカデメイアにとって、「南イタリア・シケリア方面」を拠点に活動するピュタゴラス学派との親交は複雑かつ深く¹⁶⁰、プラトンの徒としてピュタゴラス学派由来の天文学的学知に秀でるヘラクレイデスが、哲学の創始者としてのピュタゴラス像に敢えて言及したことも、アジア・イオニアを偏重するリュケイオンに対する一種の牽制として機能した、と本稿は解釈する。

フィロヘレニストとしての哲学史観を展開するディオゲネス・ラエルティオスは以下のように総括する。

「フィロソフィアについては、その起源は二つあった。一つは、アナクシマン드로スから始まるものであり、他の一つは、ピュタゴラスから始まるものである(Φιλοσοφίας δὲ δύο γεγονόσιν ἀρχαί, ἢ τε ἀπὸ Ἀναξίμανδρου καὶ ἢ ἀπὸ Πυθαγόρου).」(D. L. Proem. 13)

マケドニア・アリストテレス・リュケイオンの紐帯が称揚するともいえる「哲学の創始者としてのタレス像」を、ディオゲネス・ラエルティオスは異民族フェニキア人の血筋がタレスに付随する故に却下すると共に¹⁶¹、アテナイ・プラトン・アカデメイアの知的系統が

¹⁵⁸ Chalc. *PT* 109-11. またヘラクレイデスの天文学については、G. Lloyd (1970) 94-98.

¹⁵⁹ Cic. *TD* V 3. 8, D. L. Proem 12. 『息の絶えた女(Περὶ τῆς ἄπνου)』は既に散逸しているが、現存する諸断片から伺えることは、その形式はエンペドクレス最後の日に交わされたパウサニアスとの対話篇であり、死を巡る医学的知見やピュタゴラスに纏わる逸話などが含まれていたという。この作品に関する諸研究の総覧として、例えば Gottschalk (1980) 13-36.

¹⁶⁰ G. Lloyd (1990) 159-174, 和泉 (2008) 34-52.

¹⁶¹ 和泉 (2010) 95-120.

提案する「哲学の始祖としてのピュタゴラス像」を積極的に採用し、『ギリシア哲学者列伝』の序章で「哲学の起源は二つある」という系譜論的観点においては異例ともいえる哲学史観を表明するに至った、と本稿は解釈する。

興味深いことにアリストテレス流の哲学史では、ピュタゴラス学派は数学的諸学科（マテマタ）の創始者でありこそすれフィロソフィアの始祖として言及されることは一度もなく¹⁶²、また彼らへの呼称としてアリストテレスは「イタリアの人々（*Ἰταλικοί*）」という一種の距離感を含意する表現を多用することも興味深い¹⁶³。しかもアリストテレスは、イオニアの知識人よりも「イタリアの人々（*Ἰταλικοί*）」即ちピュタゴラス学派の学説を「異郷的」と紹介しており¹⁶⁴、このことからアリストテレスは思想的故郷を、西側世界イタリアではなく東方世界イオニアに求めていたことが伺える。しかしプラトンにとっては、東方世界イオニアこそが異郷的であった¹⁶⁵。

前4世紀後半のアカデメイアに勃興した新ピュタゴラス主義の潮流は、以上考察したように、西側世界との学問的交流を反映するアカデメイアの学風とマケドニアによるアジア重視の文化政策の意向を汲むリュケイオンの「フィロソフィア・プロパガンダ」の、その各々の知的アイデンティティーを巡る両者の相克が契機となり発生したものと思われる。そしてこの問題は我々に対して、ヘレニズム文化とは一体何であったのか、その本質規定を巡る再考を迫るといえよう。地殻変動に喩えることをお許しいただけるのならば、「ギリシア的なるもの」の構造は、イタリア・シケリア方面のプレートとアジア・イオニア方面のプレートが、それぞれアテナイというトポスに向かって逆方向から沈み込む知的緊張状態の上に形成されたともいえるだろう。新ピュタゴラス主義の展開を、この構造を一つの前提に据えて追跡することによって、古代地中海世界に端を発する知的テクトニクスの新たな断面が見えてくる。

¹⁶² *Meta.* A. 985b24ff. においてアリストテレスはピュタゴラスの徒を「数学的諸学科（マテマタ）に着手した先駆者たち」あるいは「数学的諸学科（マテマタ）の中で育った人々」として紹介する。このようにアリストテレスは、ピュタゴラスの徒を「フィロソフィア（哲学）」に結びつけることを意図的に避け、むしろ彼らの活動を敢えて「マテマタ（数学的諸学科）」の領分に限定しようとしていることが伺える。

¹⁶³ *Meta.* A. 987a10, 987a31, 988a26, *Meteor.* 342b30. 一方、プラトンはピュタゴラス学派を「イタリアの徒」として直接的に言及することはない。但し対話篇の文脈に応じて婉曲的に「シケリアあるいはイタリアの人」という言い回しが2度（*Gorg.* 493a6, *Leg.* 868b8）登場する。

¹⁶⁴ *Meta.* A. 989b30.

¹⁶⁵ イオニアをバルバロスの地と見なす風潮はペルシア戦争の余波とも思われるが、その一端を伝えるプラトンの作品として『クラテュロス』がある。

【文献】

- Gottschalk, H. (1980) *Heraclides of Pontus*, Oxford.
- Lloyd, G.E.R. (1970) *Early Greek Science: Thales to Aristotle*, London.
- Lloyd, G.E.R. (1990) "Plato and Archytas in the *Seventh Letter*", *Phronesis* 35: 159-174.
- Wehrli, F. (1953) *Die Schule des Aristoteles, 7. Herakleides Pontikos*, Basel.
- Jaeger, W. (1923) *Aristoteles*, Berlin
- Burkert, W. (1960) "Platon order Pythagoras?" , *Hermes* 88, 159-177.
- Riedweg, C. (2005) *Pythagoras*, Cornell.
- Huffman, C. (2008) "Another Incarnation of Pythagoras", *Ancient Philosophy* 28, 201-225.
- Bárány, I. (2006) "From Protagoras to Parmenides: Platonic History of Philosophy", in Sassi, M. ed., *The Construction of Philosophical Discourse in the Age of the Presocratics*, 305-329, Pisa.
- Stephen U. (1994) "Isocrates: Paideia, Kingship and the Barbarians", in Khan, A. ed., *The Birth of the European Identity: The Europe-Asia Contrast in Greek Thought 490-322 B.C.* 131-155. Nottingham.
- Haake, M. (2004) "Documentary Evidence, Literary Forgery, or Manipulation of Historical Documents? Diogenes Laertius and an Athenian Honorary Decree for Zeno of Citium", *Classical Quarterly* 54, 470-483.
- Edmunds, L. (2006) "What was Socrates Called?", *Classical Quarterly* 56, 414-425.
- 和泉ちえ (2009) 「哲学とジェンダー」『岩波講座哲学 15』47-77, 岩波書店
- 和泉ちえ (2010) 「ペリパトス学派と哲学史の誕生」 *Studia Classica* 1: 95-120.
- 廣川洋一 (1984) 『イソクラテスの修辞学校』岩波書店